IS 騎士王の系譜

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　騎士王の系譜

【Ｎコード】
Ｎ７５１４Ｓ

【作者名】
柊

【あらすじ】
車に引かれそうな女の子を助け死んでしまったオリ主は神から二度目の人生が与えられた。オリ主がいく世界は、女尊男卑の世界。オリ主は神より貰った騎士王の力でＩＳの世界を駆け抜ける。今回の作品は私にとって初の投稿作品です。
いたらぬ所も多いと思いますが、できるだけ頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

プロローグ

Side??????

目が覚めると、そこは果てしなく白が続く世界だった。

俺自身、まったく身に覚えのない世界に驚いていると、誰か後ろから歩いて近づいてきた。

とっさに、足音のした方を向くと、そこには正に美女というに相応しい女性がいた。

この場所に来てから、初めて見た人がこんな美しい人であったことに喜び、その女性にこの場所について聞こうと思ったら、突然その女性が土下座をしてきた。

突然の行動に驚いていている俺をよそに、その女性は土下座をしながら謝ってきた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ストップ！！」

俺はひぐらしのレナのごとく謝り続ける女性を止め、事情を聞いてみることにした。

その女性曰く、俺は女の子を助けたせいで死んだが、本来俺はそこで女の子に会うこと無く女の子はそのまま引かれて死ぬ予定を、作業ミスで俺が女の子を助けて死んでしまうことになったらしい。神は「本当に申し訳ありません。私のせいで貴方が死んでしまいました。どうか許してください。」

とまだ謝ってくる神を止めるため、俺は神に声をかけた。

「そんなに謝らないでください。俺は別に気にしていません。むしろ貴女のおかげで、その女の子が助かっのです。恨むどころかむしろ感謝しています。」

そう言ったら神が、「貴方のその優しさに感動しました。貴方をＩＳの世界に転生させます。」と言ってきた。

神曰く、

「神が手違いによって人を殺してしまったら、殺してしまった相手を転生させるても良いことになっています。私は、今まで見てきた転生者達は、みんな私利私欲ために非人道的な事ばかりしてきたので、私は貴方を転生させないつもりでした。しかし貴方みたいな優しい方なら、別です。貴方をＩＳの世界に転生させましょう。何故ＩＳの世界かと言いますと、今魂を受け入れることのできる世界はそこしかありません。転生特典は貴方の希望ひとつを叶えます。どうか悔いのないように選んでください。」

とりあえずＩＳの世界に行くらしい。確かＩＳはＩＳというロボット？みたいなものに乗って戦う話だったと思う。

それでは、俺は大好きだったゲームの能力にしようと思い、俺は神に「Ｆａｔｅの騎士王の能力を持ったＩＳをくださいと頼んだ。」

すると神は「わかりました。では騎士王の能力を持ったＩＳを渡します。私が言えたことではありませんが、次の人生をどうか楽しんできてください。」と神は言った。

神が魔法陣を発動させ俺の意識が途切れてきた。神が最後に何か言ったような気がしたなと思った瞬間、完全に意識が途切れた。

そして俺のＩＳ世界の物語が始まった。

プロローグ（後書き）

はじめまして。柊といいます。私は今回の作品が初投稿になります。いたらぬ点も多いと思いますが、できるだけ皆様に読んでもらえるようにしたいと思います。

第1話　ＩＳ学園入学

「全員揃っていますねー。私は副担任の山田真耶と言います。これからＳＨＲ始めますよー。」

黒板の前に立っている山田先生の話を聞き流しながら、今までの事を思い出していた。

とりあえず転生することになった俺は、テンプレどおり、赤ちゃんになっていた。

これからの羞恥プレイの事を考え、頭が痛くなりながらとりあえず今の自分の状況について、わかる範囲で調べて見ることにした。

名前は前世と同じ、白井蓮だった。
父はイケメンで母も美人と、こちらもテンプレどおりだった。

それから、結構恥ずかしい思いをしながらようやく小学校に入学することになった。

その学校でＩＳの主人公、織斑一夏とヒロインである篠ノ之箒と出会った。

しかし、主人公は織斑一夏であるが、俺はＩＳを良く知らないので、もしかしたらもともとそうだったかも知れないが、この世界の織斑一夏は女だった。

それからＩＳが誕生し、小学四年になった頃、ＩＳの開発者である篠ノ之束の家族である箒は政府から逃げるために転校することになった。

そこで俺は、箒に思い出にと白いリボンを渡したら、箒の顔が突然真っ赤になった。どうしたのだろうかと思っていると、一夏が箒と話しがしたいと若干黒いオーラを出しながら言ってきた。

そのオーラに恐怖しながら、一夏が向かった方を向くと一夏は妙に嬉しがっている箒とすでに話しをしていた。

一夏と箒の話はよく聞こえなかったが、時折負けないからとかいった声が聞こえたりした。

一夏に何の話しをしていたのかと聞くと、何故か「この鈍感男」と言われた。

その後、箒の入れ替わりのような形で、凰鈴音が中国からやって来た。

鈴音はその性格からか、友達ができていなかったが、俺が思い切って話しかけてみると、案外良い奴で話が合い友達になった。

俺の様子を見てからみんなも、鈴音に話しかけていき友達も増えてきた。

中学二年になると家の都合で鈴音が中国に帰ることになったので、鈴音の黒髪に良く似合うと思って買ってきた金色の留め金を渡した。

すると箒のように顔を真っ赤にした鈴音を見て、どうしたのだろうかと思って見ていると、また一夏から黒いオーラが出てきた。そし

てまた前と同じ展開になって、鈴音は中国に帰っていった。

そして俺は就職率の高い藍越学園に試験を受けに行くが、その際ＩＳ学園と藍越学園を間違えてしまい、ＩＳ学園の方に行きＩＳに戯れで触れたら、ＩＳが起動したのだ。
この事に俺は驚いたが考えてみると、神から騎士王、すなわちアルトリアペンドラゴンの力を持ったＩＳを貰うことになっていたので、俺自身は納得したが俺が転生者であることを知っているわけないので、『世界で唯一ＩＳを使える男』として、ＩＳ学園に行くことになったのだ。

此処まで考えていると、どうやら自己紹介の番が回ってきたので前に出て「俺の名前は白井蓮と言います。趣味はゲームと読書。特技は特にないです。これから一年間よろしくお願いします。」と普通の自己紹介をした。

教室がシーンとなったので、何かミスをしたのかと思ったら突然「キャーーーーー！！」と言った声が聞こえてきた。

俺は改めてＩＳ学園で生きていけるかなと思った。

第１話　ＩＳ学園入学（後書き）

二話目を更新しました。
一夏のＴＳに関しては、数人の友人からそうしてくれと言われたのでそうしてみました。
幾人かとフラグを構築していますが、あくまでハーレム？なので全員のフラグを回収するかは未定です。このような駄文にお付き合いしていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第二話　幼なじみとの邂逅

女子達が騒いでいると、扉の方から「静かに」という声が聞こえた。俺はその声に聞き覚えがあった。信仰と世界からのバックアップを受けてないとはいえ、英霊それも騎士王の運動能力と並ぶというありえないスペックの持ち主、織斑一夏の姉、織斑千冬さんである。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５才を１６才までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

このセリフまるでどこかの軍で、鬼教官をしていても何の問題もないと思う。

普通、こんな言葉を聞けば引くか、困惑ぐらいしそうなのに、クラスに響いた声は黄色い声援だった。

「キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」　「ずっとファンでした！」　「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

場所はあまり関係ないと思う。外国から来ている人もいるし。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」　「私、お姉様のためなら死ねます！」

きゃあきゃあと騒いでいる女子達は、気づいていないが千冬さんはかなりいらいらしている。

「……毎年、これほどの馬鹿者共が集まるものだ。感心させられる。それともあれか？私のクラスにこんな馬鹿者を集中させているのか？」

といらいらを通り越して、呆れた表情でそんなことを言っていた。

一応、千冬さんの人徳による物だから、もう少し喜んだらどうかと思っていたら、「きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」　「でも時には優しくして！」　「そしてつけあがらないように躾をして～！」

前言撤回、千冬さん同情します、と黒板の前で考えていた。

「ところで、白井、私は昔からお前は少し変わっているのではないかと思っていた。しかし、それは間違いだった。」

「当たり前ですよ。俺は至って普通の人間です」

なにを言うかといえば、そんな当たり前のことにいまさら気づくなんて、意外と千冬さんは鈍感みたいですね。

「何を言っている。白井、お前は少し変わってるいるんじゃない、かなり変わっている！」

「そんなはずありませんよ！俺は今まで目立たないよう努力していたのに！」

「なぁ、白井、少なくとも男でＩＳに乗れるお前は普通ではない。むしろ変わっている」

くっ、今まで普通に暮らせるように努力していたのに、こんなことでそれが崩れてしまうなんて（本人は目立ってないと思っているが、実はかなり目立っていた。）

「とりあえず、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎理論を半月で覚えてもらう。
その後実習だから、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ、私の言葉に返事をしろ。」

千冬さんは、人間なのだろうか？あの鬼教官ぶりも、キャスターであれば生身で倒すことができるのではないか、という身体能力があって逆らうことも出来ないからタチが悪い。

「ところで白井、いつまでも木偶の坊みたいに突っ立てないで席に座れ！」

どうせ俺は木偶の坊ですよ。

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり休み時間。とりあえず俺以外、全員女子の環境はかなり苦しいものである。
例えば、廊下を歩けば先輩達が俺に話しかけようとするが、男と話すことに慣れてないのか、なかなか話しかけられない。

こんな状況に辟易していたら、俺の幼なじみの箒がいた。

俺は砂漠でオアシスを見つけた人間のごとく、箒に近づいていき話しかけた。

「よぉ、箒六年ぶりだったな。久しぶり。」
「……蓮？」目の前にいる幼なじみは平均的身長だが、長年剣道で培ってた体はどこか長身に思わせ、昔から日本刀と思わせるその鋭

い印象は六年のうちでさらに増した気がする
そして何より印象的なのは、彼女のポニーテールだった。黒髪を結っているリボンは俺があげた物ではないが、俺があげたものと同じ物を使っているようだ。

「そういえば」

「なんだ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝していたな。おめでとう。」

そう言うと、箒は顔を真っ赤にした。……どうして怒っているのだろうか？褒めたはずなのに。

「なんでそんなことを知っているんだ。」

「何でって、新聞に載っていたから…」

「な、なんで新聞なんか読んでいるんだ。」

いや、箒さん？　流石に新聞ぐらい自由に読ましてください。後相変わらず口調は男っぽいですね。

「そういえば、どうして私だと分かったのだ？」

「箒の髪型変わってないし。何よりそのリボン俺があげたやつと違うけど、同じ種類の物を使っているだろ。」

「よくそんなこと覚えているものだな。」

「いや、普通忘れないだろう。幼なじみのことは」

そういうと、もの凄い目で睨まれた。　一体どうしてだろうか？

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴ったので、教室に戻ることにした。

第二話　幼なじみとの邂逅（後書き）

次回は、一夏とセシリアについて書く予定です。

第三話　クラス代表決定戦　前編（前書き）

今回は少し多めです

第三話　クラス代表決定戦　前編

今現在、３時間目の休み時間、女子達から珍獣扱いされて、かなりストレスが溜まっている。
普通に藍越学園に通えてたら、こんな目に会わなかったのに。
箒？　箒は、一夏に連れられてどっか行ったよ。　幼なじみ同士、積もる話でもあるのだろう。

「ちょっと、よろしくて？」

話しかけてきた相手は、金髪が綺麗な女子だった。この手合いは苦手だ。今の女尊男卑の影響をこれでもか、というほど受けてそうだし。

「聞いてます？お返事は？」

態度がかなりいらつく。自分は男よりも偉いと思っているところが特に。正直、話したくないが後々面倒な事になるから一応返事をしよう。

「あぁ、聞いてるよ。」

「まぁ！何ですの、その返事。男であるあなたがわたくしに話しか

けらるだけでも光栄なのですよ。そのような返事ではなく、もっとちゃんとした態度をとるべきではありませんかしら？」

俺は腸が煮え繰り返るのをなんとか抑えた。
話しかけられたことが、光栄と言われても、俺はこいつの事を一切知らない。
そんなことを言われても困るというものだ。

「そんなこと言われても、君のこと誰か分からないし。」

そう言ってみたら、どうやらかなり気に入らなかったらしい。
怒りで体が震えながら、かなりこちらを見下した口調で続ける。

「わたくしを知らないですって？このイギリス代表候補生で、入試主席のセシリア・オルコットを！？」

なるほど、代表候補生か。確かにそれならこの態度も頷ける。まぁ、だからといって、この態度は如何な物かと思うが。

「代表候補生か。それはかなり凄いな。」

「そうでしょう。なんせわたくしは、入試で唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから。」

「教官なら、俺も倒したぞ。」

「は……？」

その反応も、無理じゃない。なんせ自分だけと思っていたのが、よりにもよって男である俺が倒してしまったのだから。
呆然としているセシリアをほって置こうと思ったが、今までのイライラを少しぶつけさせて貰おう。

「わ、わたくしだけと聞いていましたが？」

「女子ではっていうオチだろう。」

そう言うと目の前の代表候補生（笑）はこんどこそ完全に、フリーズした。

チャイムがなり呆然と席に歩いて行くのを、ざまぁみろと思いながら見ていた。

４時間目、今教壇に千冬さんが立っている。
山田先生がノートを持って、話を聞いているから大切な話なのだろう。

「あぁ、そういえば、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

そんな大事な事、ふと、思い出したかのように言わないでください。
そういうのは、ＨＲで言うべきでしょう！

「クラス代表候補とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まぁ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで。」

女子達が騒いでいる。まぁ、こんなことを言われたら当たり前か。というか、こういう場合、第一印象が強い人が選ばれるよな。

「はいっ。白井君を推薦します！」

「私もそれがいいと思い出ます。」

やはり、こうなったか。まぁ、断ればいいだけだからいいけど。

「先生、俺辞退……」

「ちょっと待ってください。そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？

空気読んでよ。今、俺断ろうとしたじゃん。

邪魔しないで欲しい。

「実力から行けば、わたくしがクラス代表になるのは必然。それを、『世界で唯一ＩＳを使える男』というネームバリューだけで、極東の猿にされては困ります。わたくしはＩＳ学園に技術を学びに来たのです。サーカスをする気は毛頭ありませんわ！」

かなりいらつくことを、言っているがこのまま行けばクラス代表はセシリアの物だ。
邪魔しないように、一夏と箒を抑えておこう。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛でーーー」
ブチン。
「まずい料理世界一を毎年受賞しているイギリスには言われたくないよ。」
頭に来た。俺の大好きな日本を侮辱するなんて、万死に値する。大体、イギリスの料理はあの腹ぺこ王が「雑」と言うほどまずいのだ。そんな所に言われたくない。
「あっ、あっ、あなたねぇ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
「お前の頭はどうなっている。先に侮辱したのはそちらではないか。」
「もう許しません。決闘ですわ！」
「いいぜ。その決闘、受けてやる。」
こういう輩には、言葉ではなく拳で語ったほうが早いからな。
「ところで、ハンデはどのくらいつけますかしら？」
「ハンデ？そんな物いらねぇよ！」

そう言うと、クラスで爆笑が起こった。
まぁ、普通ならその反応は正しい。そう普通なら。

「なぜ、笑う？確かに普通なら男は不利だ。だが、俺はＩＳを使える。まぁ、それだけだとハンデは必要になるが、少なくとも俺は教官を倒している。条件はあいつと変わらない。」

そう言うとクラスから、笑い声が聞こえなくなった。この状況は当たり前だろう。全て正論なのだから。

「くっ、ハンデをつけなかった事を、後悔しても知りませんわよ！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやる！」
セシリアはその言葉に顔を真っ赤にさせた。クラスは、静寂に包まれている。

「話はまとまったな。勝負は三日後の木曜。放課後、第三アリーナで行う。白井とオルコットはそれぞれ準備をするように。では、授業を再開する。」

千冬さん、この状況でそんな事を言える貴女は、そこらへんの男より格好いい。そんなことを思いながら、授業は再開された。

やっと来た昼休み、俺は一夏と箒と一緒に食堂にいた。

「まったく、何を考えているの！いつも蓮は、ああやって喧嘩を買

ってみんなに迷惑をかけるの！」

「そうだぞ、蓮。まったくその喧嘩っ早い性格は直らんのか！」

俺は今、二人に説教をされている。

まぁ、確かに俺が悪いけどさ、食事の時は勘弁してくれないかな。

「大丈夫。負けはしないから。」

「「そういう問題じゃない！！」」

二人同時に言うな。

「まぁ、説教はここまでにしてあげたらどう？」

おぁ、一夏、君は神だ。

「説教はこのくらいにしてやるとして、蓮、一体どれだけ食べるつもりだ。」

箒の疑問は理解できる。俺は今、炒飯、麻婆豆腐、カツ丼、ラーメンを食べている。

今の体になってから、セイバーの性質を受け継いでいるので、ものすごくお腹がすくのだ。

「大丈夫。全部食べれるから。」

「そういう問題なのか？」

「仕方ないよ。中学に入ってからこんな感じだし。」

むっ、一夏にはもう諦められているみたいだ。

「もうすぐ、授業だな。急いで食うか。」と言ったら化け物を見るような目で見られた。

午後の授業が終わり、寮で与えられた部屋に行くことにした。
先生方曰く、誘拐などの危険があるから学園で保護することになったらしい。
千冬さんが、荷物をとって来てくれたがやはり着替えなどしか入っていなかったので、日曜にでも取りに行くか。１０２３、１０２４、１０２５番、ここだ。ようやく部屋を見つけれた、今日は疲れたからさっさと寝よう。

「誰かいるの？シャワー浴びてたからこんな格好でごめんね、今開けるから。」

この声が聞こえた瞬間、俺は自分の命が風前の灯だということが分かった。
そして逃げる間もなくシャワールームから一夏が出て来た。

「あ、あれ、もしかして蓮？」

「あぁ、お前が言ったとおり蓮だ。」

「へっ、きゃあーーーーー！！」

我に返った一夏に、鳩尾に一撃をもらい意識が反転してした。

ここはどこだ？何があったっけ。確か部屋を見つけて休もうとしたら、一夏に……

「うわっ！」

あまり思い出したくないことを思い出してしまった。そういえば、何か頭のほうが妙に暖かくて、柔らかい。

「蓮！起きたの！良かった。」

どうやら一夏がひざ枕をしてくれていたようだ。素直に一夏に礼を言い、立ち上がった。

「あっ……」

一夏、なんでそんな残念そうな顔をするんだ。

「一夏、とりあえず一緒に住むことになった。よろしく。」

「こちらこそよろしく。」

こんな訳で一夏と共同生活をすることになった。

それから三日後、決闘の日がきた。

「これが、お前のＩＳ【セイバー】だ。

「【セイバー】これが俺のＩＳ」

感慨深いものだ。俺が好きだったセイバーをＩＳとはいえ、その力を扱えるのだ。うれしくないはずがない。

「ＩＳを起動してみろ。」

「はい。分かりました。」

俺は起動した。俺のＩＳはセイバーと同じ鎧のＩＳである。

「（とりあえず武装を確認しよう。）」

『武装　近接汎用兵装　エクスカリバー（約束された勝利の剣）カリバーン（勝利すべき黄金の剣）』

『特殊兵装　風王結界（インビジブル・エア）　アヴァロン（全て遠き理想郷）』

成る程、武装もセイバーそのものか。遠距離攻撃の手段は少ないがなんとかなるだろう。

「よし、行って来い。」

「はい。」

とりあえず、今回はセシリアに勝とう。

そう、心に誓ってアリーナに向かった。

第三話　クラス代表決定戦　前編（後書き）

次回は、セシリアと戦います。

第四話　クラス代表決定戦　後編

『ーーーー戦闘待機状態ＩＳを確認、ＩＳネーム【ブルーティアーズ】中距離射撃型ＩＳ特殊装備有ーーーー』

セシリアのＩＳのデータが送られてきた。
彼女のＩＳは射撃型、接近戦に持ち込めれば勝率は跳ね上がる。
俺は負ける訳にはいかない。騎士王の誇りを守るために。

「あら、逃げずに来ましたのね。」

戦争が鼻をふふんと鳴らす。そんな行動に若干いらついたが、そこは重要視するところではない。彼女のＩＳ『ブルーティアーズ』。その外見は、セイバーには劣るとはいえ、どこかの騎士のような気高さを見せる。

「最後のチャンスをあげますわ。」

「チャンスとは？」

「わたくしが一方的に勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの姿を晒したくなければ、今ここで謝るというなら、許してあげないこともなくてよ。」

俺は怒りを通り越して、呆れ果てることしか出来なかった。

「それはチャンスとは言わないし、そんなものいらん。」
「そう？残念ですわ。それならーーー。」
『ーーーー警告！敵ＩＳ射撃体制に移行。初弾エネルギー装填を確認ーーーー」
ＩＳが警告をあげると同時に（スターライトＭｋ２）が俺に向けられる。
その銃口にエネルギーが収束しているが、こちらを嘗めているのか、軌道が見え見えだった。
「お別れですわ！」

不意をついたつもりで、トリガーを引きこちらに攻撃してきた。
俺はその攻撃を見えない剣で切り裂いた。

「なっ！！」

まぁ、驚くのも無理はない。セシリアは恐らく俺の剣が見えてないからだ。
俺の剣を纏っている風王結界は、風を圧縮することで、光の屈折を変え文字通り剣を見えなくするのだ。その力はハイパーセンサーでも、正体を見破ることはできない。

「何をしたのですの？」

「さぁ？何をしたのだろうね。」

「ふざけないでくださいまし。」

彼女とくだらない問答をしながら、彼女に急接近しようした。彼女は驚きながらも、俺に牽制の弾丸を打ってきた。
流石、代表候補生だ。とっさのことでもきちんと処理をしたのだから。

「踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。弾丸の雨が降り注ぐ。最初から本気だせよ。手加減とは、相手にとって失礼だ。俺の流儀に反する。弾丸の雨を剣で切り裂き続けると、突然弾丸の雨が止んだ。恐らく特殊武装を使うのだろう。

「見せてあげますわ。わたくしのブルーティアーズを！」
そう言って二基のビットを解放した。
兵器とＩＳ名が一緒ってややこしいな、おい。　ビットはかなり単調な攻撃しかしない上に、軌道も読みやすい。恐らく、オートマニュアルで操作しているのだろう。特殊武装の性質を理解仕切れていないらしい。これなら、さっきの弾丸の雨の方がましだ。
そして俺は前から突撃しながらレーザーを撃ってくるビットに接近。そしてビットに一撃をいれ撃墜させる。それを見た彼女はありえないという目で見てきた。
もう片方も急接近してから、一撃をいれ撃墜。彼女に接近しようと

したが、新たなビットをこっちに向かって撃ってくる。

「どうやら貴方は、本気を出さないと勝てないみたいですね。これからは全力全開で行かせてもらいますわ。」

彼女は本気でくるようだ。ならば、こちらも相手の気持ちに答えるとしよう。更に苛烈になっていく攻撃の中、俺はそう誓った。

それから２０分近く経ったが、ＩＳが俺の動きについてこれず、相手の攻撃をくらい若干こちらが不利な状況だ。

「試合開始から２７分、わたくしを相手にここまで持たせたのは貴方が初めてですわ。ですが円舞ももうすぐ閉幕。最後の踊りを楽しみましょう。」

彼女は残っていたと思われる６基のビットを展開した。ちっ、まだ残ってたのかよ。恐らくあの攻撃を喰らえば終わりだ。くそ、もう少しなのに。

彼女がビットに攻撃命令を出す。

とっさに避けようとしたが、無理な使い方でスラスターが壊れてしまった。

そして、６基のビットによる集中砲火による爆発に包まれた。

此処でピット内の様子を見てみよう。

「千冬姉、どうしよう、蓮が、蓮が！」

「織斑先生！蓮は大丈夫なんですか！」

一夏と箒は、かなり慌てながら言う。

しかし千冬は、そんな二人とは対象的に落ち着きながら、にやりと笑った。

「千冬姉！笑ってる場合じゃないよ！」

「そうですよ！流石にさっきの攻撃は危険です。今すぐ救護班を呼ぶべきです。」

しかし、千冬は二人に何を言っているんだ？という目で見た。

「何を言ってる二人とも。まだ白井は負けてない。むしろ今から白井の反撃だ。」

千冬の言葉に驚く二人をよそに、千冬はアリーナを見た。

俺は爆炎に包まれる瞬間に、一次移行（ファーストシフト）が完了した。今までの実体ダメージが消え、俺のＩＳは俺専用になった。

「ま、まさか……一次移行！？貴方今まで初期設定だけで戦っていたのですか！？」

驚くセシリアをよそに、俺は彼女に接近した。それに反応して、ビットを俺に向かって撃ってきた。確かに、先程までの俺に対してな

らこの攻撃は有効だ。だが、今の俺に対しては悪手だ。

「見せてやろう。このＩＳの力を！」

「真名開放『アヴァロン（全て遠き理想郷）』

俺が真名開放した瞬間、俺に迫っていたレーザーは全て消えていた。

「なぜ！？わたくしのビットの攻撃が！？」

アヴァロンの効果は絶対防御とレーザー系の攻撃を吸収し、自分のエネルギーに変換するというものである。

「君に対して、敬意を評して俺の聖剣を見せてやろう！」

「風王結界、解除」

その言葉と共に、剣を纏っていた風は霧散し、黄金に輝く剣が出て来た。

その神々しさにセシリアも観客もただただ圧倒された。

「これで終わりだ！真名開放『エクス（約束された）カリバー（勝利の剣）」

剣から発生した光は、セシリアを撃ち抜きそのシールドエネルギーを０にした。

ＩＳが解除され、落ちて叩きつけられるのは可哀相なので彼女を受け止める。

「試合終了！勝者！白井蓮！！」

この宣言で大きな歓声が起こる。

これからの学園生活を考えると少し頭の痛くなる蓮だった。

第四話　クラス代表決定戦　後編（後書き）

次回は今回の話の後日談になります。
ぜひ感想をお願いします。

第五話　クラス代表決定戦　後日談

「蓮、怪我はない？大丈夫？」

「蓮、大丈夫か？」

俺が試合から帰ってくると、二人が心配してこちらに来てくれた。

「二人共、そいつは大丈夫だ。別に心配する必要はない。」

千冬さん、確かにそうだけど貴女も少しは心配してください。

「それよりも、あのＩＳの能力はなんだ。説明しろ。」

「そうよ。すっかり忘れていたけど、あの真名開放って言うのはなに？」

「確かに、不可思議な点が多いな。説明して貰おう。」

三人からの言葉と視線が痛い。これが無かったら、可愛いのに。

「ねぇ？何か変な事考えなかった？」

「イエ、ナニモヘンナコトハカンガエテイマセン。」

一夏、怖いよ。そして俺の心の中を読まないでください。

「えっと？とりあえず俺が最後に使ったものは唯一仕様（ワンオブアビリティー）真名開放だ」

「「「真名開放？」」」

三人は訳が分からないと言った感じで首を傾げる。まあ、当たり前だろう。Ｆａｔｅがないこの世界では知っている人はいないのだから。

「真名開放は武器に宿っている力を真名を言う事によって開放する能力。力が強すぎるから、アヴァロンは二回、他は一回のみとなっている。」

「成る程。武器の潜在能力を開放する力か。
確かに有効的だが、そこまで強くはないな。」

「どうして？」

「武器の潜在能力を開放する力は魅力的だが、使用制限があるから使い勝手の良い物ではないだろう。」

「確かに。」

どうやら一夏は納得したようだ。
少し箒は、訝しそうな目で見てきたが、千冬さんの言葉で一応納得したようだ。

「今日は解散！明日も授業はあるから、早めに休んでおけ！」

「「「はい！」」」

俺は千冬さんの凛々しい声に応えて、アリーナを後にした。

白井蓮との試合の後、セシリアはシャワーを浴びていた。
シャワーからは熱めのお湯が噴き出し、白人にしては珍しい均整のとれた体をボディラインをなぞりながら、流れて行く。

「白井蓮……」

彼女の頭の中には、今日自分を負かした相手の顔が浮かんでくる。
その様子は正しく、恋する乙女そのものである。

「今日の試合……わたくしの敗北……」

浮かびあがる光景は今日の試合。言い訳をすることすらも出来ないほど完膚なきまでの敗北だった。しかし、自分の内から出てくる感

情は、まるでいままで探していたものが、見つかったような喜びだった。

「白井蓮、彼は恐らくわたくしとの試合は眼中になかったようですわね。」

彼は、わたくしとの試合に興味があるようには感じられなかった。恐らく、彼はわたくしに負けるとは、露にも思って無かったようだ。今までの男性とは違う、圧倒的な強さと意思、そして誇りを持っていた。

「父とは違う、男性……」

セシリアは自分の父親について、思い出していた。父は名家に婿入りした男性だった。
父は、いつも他人の顔色を伺っていた人物で、情けなく、誇りや強さとは無縁な人だった。
そんな父の姿を見て、昔のセシリアは自分より弱い人とは結婚しないという、誓いを立てた事もある。

しかし、そんな両親もいない。三年前に鉄道事故で亡くなったのだ。どうしてその日は二人揃っていたかは、永遠に分からない。
ただ、あの日から自分は茨の道を行くこてを、決め付けられたのだ。
両親から託された莫大な遺産を守るため、必死に勉強した。その過程で、ＩＳ適性試験を受け、そこでＡ＋という極めて高い適性が出

てきた。　国から国籍保持のために様々な好条件が出された。その中に両親の遺産を守ることも含まれていたので、飛び付いて努力した。
そして日本にて、自分の専用機たる【ブルーティアーズ】の稼動データを取るため来日、そしてようやく出会えた。

「わたくしの捜し求めた男性……白井蓮」

蓮の名前を呼ぶ度に、熱くなる自分の体、その心地良い感覚に戸惑いつつ、彼の心に自分という存在を刻み付けたいという欲求が、湧き出てくる。
そして彼女は決意する。
蓮という男性に、自分を愛して貰うことを。
たとえ、どんなが障害があろうとも。
そして彼女は、また彼との試合を思い出していると、一つの疑問が生まれた。
（彼のＩＳは、エクスカリバーとアヴァロンを装備してましたわ。二つ共、彼の騎士王が使ったとされる由緒正しきものですわ。なぜそれを彼が持っているのでしょうか？もしかして彼は、イギリスと何らかの繋がりがあるのかもしれませんわ。）
そのような事を考えながら、　シャワーを浴びていたセシリアだった。

「では、一年一組代表は白井蓮くんに決定です。」

山田先生は嬉々として喋っている。クラスの女子はものすごい盛り上がりを見せている。　その中で一人苦虫を噛みつぶした顔

をしている俺は、かなり浮いているだろう。

「先生、質問があります。」

最後の望みをかけて、先生に質問をする。

「はい。白井くん」

「クラス代表は辞退することは、できますか？」

「出来る訳ないだろう。馬鹿者。」

危なっ！　千冬さんの出席簿アタックをギリギリ避ける。英霊の反射神経でギリギリって千冬さんの出席簿は概念武装かなんかなのか！

「一旦受理された以上、変更は出来ないし、仮に出来たとしても、試合に勝ったのはお前だ。変更する気はない。」

やはり面倒だ。だが、千冬さんは一度言ったことは変えない。

「なあ、一夏と箒。」

「なに？」

「なんだ？」

「あのさぁ、俺にＩＳの訓練をしてくれないか？」

「何で？蓮は、代表候補を倒せるのだから、私達に訓練を頼む必要はないんじゃない？」

「一夏の言う通りだ。織斑先生ならともかく私達に頼む必要はないんじゃないか？」

確かに二人の疑問はもっともだ。だが、二人は気づいてない。

「二人とも。確かに俺はＩＳを操縦できる。だが、俺は操縦の半分は直感で行っている。」

「はぁ？」

二人は知らないが、俺には騎乗のスキルがある。流石にＩＳは、完全に使えないがそれでも半分は使える。

「お前はバグだ。」

「私も箒の言葉に同意するわ。」

何故二人とも、疲れたような顔をしているのだろう？

「まぁ、お前の頼みだ。引き受けよう。」

「私もＩＳの訓練引き受けるわ。とりあえず明日の放課後からは、予定を空けておいて。」

「分かった。放課後は空けておくよ。二人とも俺に付き合ってくれてありがとう。」

「そ、そうか。」

「お、幼なじみなんだし当然だよ。」

二人とも顔が赤いな。もしかして俺の笑顔って気持ち悪いのだろうか。

「（なぁ、一夏。）」

「（何？箒。）」

「（絶対、あいつ自覚ないよな。）」

「（そう見たいだね。）」

「（あいつの女誑しぶりは相変わらずだな。）」

「（まぁ、それに引っ掛かかった私達も私達だけど。）」

二人とも何か話しているが、よく聞こえない。
「先生！」
「なんだ？オルコット。」
「昨日の蓮さんの動きを見るに、若干むらがあります。そのせいで、スラスターが壊れてしまいました。ですので、このわたくし、セシリアオルコットに彼のＩＳ操縦の訓練を任してくださいませんか？」
「「ちょっと待った！」」
「蓮の訓練は、私達で事足りる。私達が直接蓮に頼まれたからな。」
「オルコットさんは、今回は引いてください。頼まれたのは、私達ですから。」
「あら、篠ノ之さん、貴女はランクＣでしたわね。そちらの織斑さんは、ランクＢのはずですが、ランクＡのわたくしに何かご用かしら。」
「ら、ランクは関係ないだろう。頼まれたのは私達だ。れ、蓮がどうしてもと懇願するからだ。」
してねぇよ、おい。
「座れ、馬鹿ども。」
三人に近づいていき、出席簿で三人の頭を叩いた。流石が千冬さん、迫力が違う。

「お前たちのランクなどごみだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな。」

さしものセシリアといえども、千冬さんには逆らえないらしい。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

「では、クラス代表は白井蓮。異存はないな。」

はーいとクラス全員一丸となって返事をした。団結は素晴らしい。ただ、俺にとってもいいことであればよかったなと思う。心からそう思う。

第五話　クラス代表決定戦　後日談（後書き）

次回は、転校生がやってきます。
どうか、感想の方をよろしくお願いします。

第六話　二人目の幼なじみ

日が沈み、暗闇が支配する夜のＩＳ学園の校門前。そこには、体に不釣り合いなボストンバッグを肩から下げた少女がいた。少女の髪はツインテールでその黒髪によく似合う金色の留め金が特徴的だ。

「ここがＩＳ学園……」

彼女の言葉はまるで今まで会えなかった恋人に会えるというような、喜びが感じられた。

「受付は、どこだっけ？」

そう言いながら彼女は、ポケットから地図のような物をとりだした。その地図は、くしゃくしゃで、彼女の大雑把な性格を良く示している。

「本校舎一階総合事務受付……ってどこにあんのよ。」

彼女はくしゃくしゃになった地図に文句を言う。その姿は、端から見れば逆ギレして紙に当たっている風にしか見えない。

「まあ、校舎の中にあるんだし、探せば見つかるでしょう。」

彼女はかなりポジティブな性格のようだ。
思考よりも行動。それは一見、実践主義のように聞こえるが、見方によってはただ物事を良く考えない猪な少女である。

（はぁ、出迎えがないとは聞いていたけど、この広大なＩＳ学園から受付を探せとか少し不親切すぎるんじゃない？）

少女の外見は日本人のそれに近いが、よく見ると違う。そのどことなく勝ち気な感じのする瞳は中国人のそれである。

（誰もいない。考えてみたら今の時間生徒がいるはずないよね。）

学園内の敷地をぐるぐる回っている彼女は、同じ所を何回も往復している。

（あーもー、面倒くさいな。誰かここに来てくれないかな。）

その言葉が天に通じたか、本来居るはずがない生徒の声が聞こえた。
その声の方向に視線をやると、女子がＩＳ訓練施設から出て来た所だった。
訓練施設は、どこの国も同じような物なので、すぐに分かった。
その声の主に声をかけようと思い、アリーナに向かう。

「だから、感覚では分かるけどイメージができないんだ。」

本来、この学園では聞くことのない男の声。
それも自分が恋焦がれている男の声。
まさかの再会に、心臓の鼓動が跳ね上がる。

（あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちょっとしか会わなかっただけだし。）

（それにもし忘れてたら、あたしが美人になったからだし。）

少女はかなりポジティブな考えをしながら、再び歩み始める。

「れーー」

あっ、少し声が裏返っちゃったよ。なんかあたしがすごい意識してるみたいで、恥ずかしいなぁ。

「蓮、いつになったらイメージが掴めるのだ。お前の場合、イメージが出来てなくても操縦出来るが、イメージが出来ていないせいでＩＳの動きが悪い。」

「そんなこと言われても、お前の説明、抽象的過ぎるだろ。なんだよ。『くいって感じ』って意味が分からん。」

「だから、くいって感じだ。」

「それが分からないんだ。おい、先に行くなよ箒！」

先に行く女子を追いかける蓮。

誰？あの女の子。とっても親しそうに見えたしなんで名前で呼んでの？

疑問が湧き出てくるなか、少女はあることを思い出す。

蓮……そう言えばあいつはかなりのフラグメーカーだったわね。この女子オンリーの場所だ。一人や二人、フラグが立っていてもおかしくないわね。

その考えに至った瞬間、心に冷たい感情が流れ込んでくる。

それからすぐ、総合事務所を見つけた。アリーナの後ろの建物が本校舎だったからだ。灯りがついていたので、すぐ場所が分かった。

「では、手続きは以上で終了です。ＩＳ学園にようこそ。、凰鈴音さん。」

少女ーーー鈴音は事務員の言葉を上の空で聞いていた。鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「白井蓮って、何組ですか？」

「白井君？一組よ。凰さんは二組だから、お隣りね。彼、一組のク

ラス代表だったわね。男の子なのに、すごい実力の持ち主だそうよ。」

事務員の言葉を聞きながら、次の質問をする。

「二組の代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ。」

「名前は？」

「そんなこと聞いてどうするの？」

鈴音の態度を疑問に思いつつ、事務員は鈴音に聞き返す。

「友人を驚かしたいから、代表をあたしに譲ってもらおうと思って。」

にっこりとした笑顔をだったが、その目は決して笑ってなかった。

俺は今グラウンドにいる。これからＩＳの操作実習があるからだ。

「これよりＩＳの基礎の基礎である飛行操縦を実践してもらう。専用機持ちのオルコット、白井、織斑の三名にしてもらう。早く展開して飛んでみせろ。」

「「「はい！！」」」

千冬さんの言葉に勢いよく返事をする。

それから俺とセシリアは展開を終えたが、一夏はまだ左手に装着されている白式の待機状態の指輪に手を当て集中している。

一夏は、実はＩＳを使うのはこれが二回目らしい。何故あの時、まだＩＳの事を良く知らないのに、俺に教えると言ったのはなんでだ？と聞くと、「セシリアと箒に負けたく無かったから。」と答えた。確かに悔しいかも知れないが、使用歴が長いのだから負けるのは当たり前なのに、何故二人に負けたくないと答えたのだろうか？そんな事を考えていると、一夏がようやくＩＳの展開に成功したようだ。

「織斑。」

「は、はい……」

「お前はまだ二回目の起動だからな、もっと練習をしろ。オルコットか、白井に練習を見てもらえ。二人はそれでいいな。」

「はい。」

「はい、分かりましたわ」

一夏は千冬さんの言葉に落ち込んだが、俺達の言葉を聞き、笑顔になる。

「よし、飛べ。」

千冬さんの言葉を聞き、俺達は飛び上がる。
やはり、この中で一番使い慣れてるセシリアが一番だった。少し遅れて、俺。一番最後はかなり遅れて一夏だった。

「何をやってる織斑、お前の白式はブルーティアーズよりもスペックは上だぞ。それに白井もＩＳのスペックはその中で一番だ。もっときっちりとやれ。」

千冬さんからお叱りの言葉が俺と一夏に来る。千冬さん、俺、箒との訓練でましになったけどまだイメージがあやふやで、ほとんど騎乗のスキルの直感で飛んでる俺にそんなこと言わないでください。

千冬は飛び上がって行く三人を見ていた。

（一夏は心配ではあるがなんとかなるだろう。だが、蓮、一体あいつはなんだ？本来、イメージがなければ、使えないＩＳを全て勘のみで動かすなど人間技じゃない。）

確かにＩＳは勘で動かすこともできる。だがそれは、相手の不意打

ちを避けるぐらいにしか本来使えない。それをあいつは全て勘のみで動かした。それを例えるならば、車の操縦方法を知らない人間に車を正しく動かせと言っているようなものだ。

昨日、束にも確認したから間違いない。

「ねぇ。ちーちゃん。試合どうだった。やっぱりあのＩＳでも、れっくんの負けでしょう？」

「それが蓮の奴が勝った。」

「凄いね。れっくん、まさか三日で代表候補生を倒すなんて。どんなＩＳの訓練をしたんだろう？」

「それがだな、束。あいつ、基本動作以外は全部勘でやってのけたらしい。」

「嘘！ＩＳはイメージが重要なんだよ。一部の動作ならともかく、全部の動作を勘で行うなんて。」

「ああ、私もそれが疑問なんだが、お前はどう思う？」

「正しく、バグキャラかチートだよ、ちーちゃん。でもその話が本当だとすると、少し興味が沸いて来たよ。まさか、この私が男性に興味が沸いて来る日が来るなんて、思わなかったよ。よし決めた。ちーちゃん、今度ＩＳ学園にれっくん見に行くから、よろしく。じゃあね。」

「おい、ちょっと待て。束！」

そんな事を思い出しながら、まだ空にいる三人に指示を出すのだった。

「では、三人ともこれより急降下と完全停止を実演しろ。目標は地表１０センチだ。」

「分かりました。じゃあ、最初は俺が行くよ。」

そういって急降下、そして１０センチの所で停止。それを見た女子が歓声を上げる。

セシリアも同様に成功。

「や、やばっ」

「まずい！」

一夏は失敗し、墜落する。咄嗟に俺はエクスカリバーを取り出した。

「ストライク・エア（風王鉄槌）」

俺は、風王結界の風に指向性を持たせ一夏の方に撃ち減速させ、一夏を受け止める。

周りは最初、驚愕の表情だったがすぐに歓声が沸き上がった。

「今のはなんですの？」

「今のはストライク・エア。風王結界の風に指向性を持たせ、相手に撃ち出す俺のなかで唯一の遠距離攻撃だ。さっきのは、威力を抑えて一夏を減速させただけだ。」

この言葉にセシリアは戦慄した。

（ＩＳを使ってから短期間でここまでの芸当をやってのけるなんて、流石わたくしが惚れた男性ですわ。）

「織斑、誰が地面に激突しろと言った。白井が助けなかったら危なかったぞ。」

「すみません……」

「まあ、怪我が無かったんだ。後で白井にお礼を言っておけ。では、今日の授業はここで終わりだ。解散。」

そして授業が終わった。

第六話　二人目の幼なじみ（後書き）

やはり束の口調が変になった。あの口調は難しいです。次回は二人目の幼なじみとの再会です。では、次回もぜひＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第七話　凰・鈴音との再会（前書き）

すいません。少し遅れました。
では、第七話です。

第七話　凰・鈴音との再会

「というわけで、白井君クラス代表就任パーティーだぁ！白井君、おめでとう。」

「おめでとう。」

クラッカーがぱんぱんと乱射される。俺の心は、もうすでにボロボロだ。

今は、夕食後の自由時間に、寮の食堂を借りてやっている。各自、自分の友人とわいわいと騒いでいる。

「……」

めでたくない。まったく持ってめでたくない。なぜ、こんなパーティーに参加しないといけない。それは、まあ、『白井蓮クラス代表就任パーティー』だ、主役である俺がいるのは普通だろう。だが、主役なのに格好がまるで主役じゃない。

「おい！なんで俺は、椅子に縄で固定される必要があるんだ！」

そう、今の俺の格好は縄で椅子にくくりつけられている状態だ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「だって、逃げるじゃん。」」」」」」」」」」」」」」」」」

確かに俺は、一回逃げたさ。だが、そのたった一回の事でここまで、やる必要があるのか？特に一夏とセシリア、そして箒。お前らなんで率先して俺を捕まえようとしたんだ。俺がお前らを信頼して近づいたら、縄で人を縛りやがって。人の信頼を裏切るな！

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生を取材に来ましたって、これはまた凄い格好だね。おもしろいから写真に撮っておこう。」

「やめてください。」

こんな格好、学園全体に知れ渡ったら、社会的に死ねる。

「冗談だよ、冗談。あ、私は、黛薫子。よろしく。新聞部副部長やってまーす。はいこれ、名刺ってその格好じゃ、受け取れないか。じゃあ、そこの君彼に後で渡しといて。」

「では、白井蓮君。クラス代表になった感想は？」

ボイスレコーダーを期待した目と共に、差し出してくる。

「あの〜〜」

正直、俺はクラス代表なんてまったく興味がない。だけど、このきらきら輝いている目で見られると断ろうにも、断れない。

「はい、まあ、優勝出来るよう努力します。」

「えー。もっといいコメント頂戴よ〜。俺の剣のサビにしてやるぜ、とか！」

「俺は辻斬りですか！」

流石にその発言は、酷いでしょう。

「というか、あんたもとから捏造する気だったんだろう。」

「うん。まあ、そうだよ。」

成る程、こうやって情報は改竄されるのか、って感心することじゃない。というか、情報発信者の裁量によって、独断と偏見が世に広まるのか。恐ろしい。

「ああ、セシリアちゃんもコメントをちょうだい。」

「わたくし、この類のことはあまり好まないのですが、仕方ないですわね。」

好まないと言いつつ、お前、すぐ近くで身嗜みを整えてただろう。

「コホン。ではまず、彼がいかに強かったかと言うと、まず……」

「ああ、長そうだから、写真だけでいいや。」

「ちょっと、貴女から話を振って来たのですわよ。最後まで聞きなさい！」

「いいの。捏造しておくから。そうだ！白井君に惚れたことにしよう。」

「なっ、な、ななっ、……」

かぁ～～～と顔が真っ赤になっていくセシリア。よほど怒っているんだ。ここは怒りを静めなければ。

「先輩、俺みたいな男に惚れる訳ないでしょう。」

「え、そうかなー？」

「まったく貴方という人は。少しは女心というのを、理解したどうなのですか！？」

え、折角、誤解を解こうとしたのに、なんでセシリアが俺に怒るの？

「だ、大体貴方は……」

「と、とりあえず二人とも、写真撮るから並んで。」

「えっ？」

意外そうなセシリアの声。だが、どことなく、喜色を含んでいるように聞こえる。

「注目の専用機持ちの二人だからね。ツーショットしてもらうよ。あ、握手とかしてるといいかもね。」

「そ、そうですか……。そうですわね。」

なぜかモジモジし始めたセシリアは、千載一遇のチャンスを得たような感じなんだろう。

「あっ、撮った写真はもちろん渡すわ。」

「本当ですか？ありがたいですわ。」

先輩は俺とセシリアの手を引いて、強引に握手させた。

「「……」」

一夏と箒から黒いオーラが出て来ている。文字通り視線で人が殺せそうだ。

「ふ、二人共？どうした？俺なんか悪いことしたか？」

「「別に。なんでもない」」

更に黒いオーラが増したので、咄嗟に目を背ける。

「じゃあ、写真をとるよ。３５×５１÷２４は～？」

「え、えっと……７４・３７５？」

「正解。良くできました。」

パシャッとカメラのシャッターが切られる。

俺は、周りを見てみると思わず驚いてしまった。

「なんで、お前ら入ってんだよ？」

一組のメンバーが、撮影の瞬間に集合していた。こいつらは、あれか？瞬間移動かなんか使えるのか？

「やれやれ……」

俺はこう言わずには、居られなかった。

「おはよー白井君。転校生の話聞いた？」

朝、席につくとクラスメイトに話しかけられた。俺も随分この学園に慣れてきたな。最初の珍獣扱いが、嘘のようだ。

「転校生か。知らないが、にしても凄いな。この学園に転校するなんて。」

「うん。なんでも中国の代表候補生らしいよ。」

ふーん。中国か。あいつの故郷だったな。そういえば、あいつ元気かな？

「わたくしの存在に中国が危機感を持ったのかしら？」

セシリア、それは自分で言うことではないだろう。だが、この時期の転校となると可能性は高いな。

「転校生ね～」

「なんだ、蓮、転校生の事が気になるのか？」

箒！いつの間にここに来たんだ？昨日は、冗談だったが、まじで瞬間移動できるのか！？

「うん。そりゃまあ、気になるな。」

俺がそう言うと何故か箒が不機嫌になった。どうしてだろう？

（こいつのフラグメーカーぶりは良く知っている。中国代表候補生とフラグを立てるかも知れん。）

箒は蓮のフラグメーカーぶりを警戒していた。

「そんなことより、セシリア、今日の放課後も練習付き合って貰ってもいいか。」

「ええ、構いませんわ。ですが専用機持ちは、一組と四組だけですから、そこまでしなくてもいいんじゃありませんの？」

「そんな情報、古いわ。二組の代表も専用機持ちよ！」

突然、廊下の方から声がした。俺達は廊下に注目した。

「私が中国人代表候補生、凰　鈴音。蓮、久しぶりね。」

そこには、俺の幼なじみの鈴がいた。

「鈴　、鈴なのか？」

「私以外誰だってのよ。一年ぶりね。」

俺は一年ぶりの幼なじみの登場に、今だ呆然としていた。鈴が代表候補生？こいつ、そんなに頭が良いのか？

「ねぇ。蓮、昨日一緒にいた女は……って痛っ。」

何か言おうとした鈴だが、千冬さんに出席簿で叩かれる。

「ここでは、織斑先生だ。それにすでにＳＨＲの時間だ。さっさと

クラスに戻れ！」

「蓮、休み時間、覚悟しておきなさいよ。それと一夏久しぶり。」

そう言って、自分のクラスに戻って行く鈴。

「なんでさ……」

俺は某正義の味方の口癖を言わずには、居られなかった。

第七話　凰・鈴音との再会（後書き）

今回、長かったので分割しました。本編は急いで制作しているので、もう少しお待ちください。
次回もＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第八話　食堂にて

午前の授業が終わり、俺は食堂に居る。セシリアと箒は妙に授業に集中できず、千冬さんから何発も頂いていた。

「蓮、お前のせいだ！」

「蓮さんのせいですわ！」

「俺が何をした！」

俺の所にやって来た二人は、口々に言ってくる。いや、どう考えてもお前らが悪いだろう。
千冬さんの授業に集中しないなんていう自殺行為をしていたのだから。

「とりあえず、飯を食わせろ。俺が食う量知っているだろう？」

「うっ、仕方ありませんわね。」

「仕方ない、そうしてやるか。」

「三人とも、早く行こう。」

一夏の声を聞き、　全員で食券売り場に行く。

「待ってたわよ！蓮！」

俺達の前に現れたのは、今、噂の転校生、鈴だった。やっぱり、変わらないな～。昔とまったく変わらないツインテールも、良く似合ってるし。しかも、あの留め金は俺があげたやつじゃん。大事に使ってくれてたのか。

「鈴、その留め金使ってくれてたのか。ありがとな。」

「あ、当たり前よ。あんたから貰ったんだから、使わないわけないでしょうが！」

嬉しいことを言ってくれるな。いつもはツンデレだが、優しい所は優しいな。最高の幼なじみだ。

「なんか、誤解されてる気がする。」

「仕方ないよ。蓮だから。」

一夏、なんだよ、その目は。まるで、出来の悪い弟を見るような生暖かい目で見ないでくれ。

「にしても一夏、久しぶりね。元気だった？」

「久しぶりね。私は元気だったよ。そっちは？」

「あたしも元気だったよ。それより一夏、まだ落とせてなかったのね。あたしが来たからにはあなたの好きにはさせないわよ！」

「鈴、はっきり言ってくれるわね。でも、今回は必ず蓮を振り向かせて見せるわ。」

「蓮は、あたしに振り向かいてくれるわよ。」

一夏と鈴は、早速話し合っているな。

「そ、それよりも蓮さん？彼女とはどういう関係で？」

「そうだぞ、蓮。彼女との関係について、教えてくれ。まさか、付き合っているのか！」

なんで、そうなるんだ。大体、自分で言うのもあれだが、俺と付き合う物好きはそうそういないだろう。

「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ……」

「お前ら、そんな訳ないだろう。こいつとは、ただの幼なじみだ。」

「……」

「なんで睨むんだよ？」

「なんでもないわよ！」

鈴が突然キレだした。なんでだ？

「幼なじみ……？」

訝しそうな声で箒が聞き返してきた。
そういえば、鈴と箒は面識なかったな。

「ほら、箒が引っ越したのって小四の終わり頃だろ？鈴が、転校したのは小五の始め頃だ。
で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりだな。」

「で、こっちは箒。お前に話したろ？小学校の頃からの友人で、一夏が通っていた道場の娘。」

「へえ、そうなんだ。」

鈴はまじまじと箒を見る。箒も負けじと、見返している。

「初めまして。凰　鈴音です。これからよろしくね。」

「ああ、こちらこそ、よろしく。」

そういって挨拶を交わす二人。だが、何故か二人の間に火花が見える。

こんなに仲が良さそうなのに、どうしてだ？

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れないでくださいまし。中国代表候補生、凰　鈴音さん？」

「あんた、誰？」

「なっ！？わたくしの事をご存じないの？このイギリス代表候補生のセシリア・オルコットを！？」

「うん。興味ないし。」

「な、な、なっ……！？」

怒りで顔を真っ赤に染め上げているセシリア。まあ、プライドの高いセシリアだから仕方ないだろう。

「せ、セシリア落ち着いて。」

「落ち着いていられますか！」

セシリア、さらに怒り始めたな。顔がゆでだこみたいなっている。

「い、い、言っておきますけど、わたくしはあなたみたいな方には絶対負けませんわ！」

「さ。あたしもあんたみたいな奴に負けるつもりは、毛頭ないわ。」

相手を小馬鹿にした感じで言う。昔から鈴は気に入らない相手に対しては、ああだよな。

しかもあいつは自分の言ったことは、必ず出来ると確信しているからたちがわるい。

「……」

「い、言ってくれますわね。」

「ははは、鈴、その辺にしといたら？」

箒は無言で箸を止め、セシリアは手を、わなわな震えさせ、一夏は、乾いた笑いをしている。それに対して、鈴はなんでもないかのように、ラーメンを食べている。何、このカオス。誰かこの空気を変えてくれ！

「そういえば、蓮。」

なんだ？この状況で、俺に話しを振らないでくれ。

「あんた、クラス代表だったわね？」

「う、うん、まあ、成り行きで。」

「ふーん……」

鈴はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。昔、レンゲを使えと言ったら、「女々しいからヤダ」とか言いやがって。お前は男か。胸も小さいし。

「今、何か変なこと考えなかった？」

「いえ、考えておりません。」

鈴は、心が読めるのか！

「そ、それよりも、ＩＳの操縦見てあげてもいいけど？」

鈴にしては、言葉の歯切れが悪いな。

「まじか？それは助かー」
「蓮に教えるのは私の役名だ。頼まれたのは、私だ。」
「あなたは、二組でしょう？敵の施しは受けませんわ。」

二人とも、そこまでクラス代表戦に燃えているのか。俺も頑張らないと。

「何、言ってんの？あたしは、蓮と話しているの。あなた達は関係ないでしょ？」
「関係ならあるぞ。私は蓮にどうしてもと頼まれているのだ。」

前も思ったが、そこまで言ってないぞ。何故箒はどうしてもを強調するのかな？

「蓮さんは、一組の代表ですよ。一組の人間が教えるのが当然ですわ。あなたこそ、二組ですから関係ないでしょ。」
「二組とか関係ないでしょ。あたしは蓮の幼なじみだし。」
「そ、それを言うなら私も幼なじみだぞ。それに、一夏もだ。それに、蓮はうちで何回も食事している仲だ。付き合いは長いぞ。」
「食事？うちでもそうだけど？」

そりゃ、鈴の家は中華料理店だ。俺の家は両親共々料理の腕が壊滅的だからな。鈴の家の店は、とにかく安いし量も多い、さらにうまい。俺の食べる量が増えてからは、更に行くようになったな。

「蓮、どういうことだ！？説明しろ。」

「わたくしもですわ！蓮さん、一体どういうことですの。」

「二人共、落ち着いて。鈴の家は、中華料理店なのよ。」

「そうだぞ、二人共。俺は鈴の家に食べに行っていただけだ。」

「な、何だ。そうなのか？」

「お店なら、別におかしなことはありませんわね。」

「そうよ、二人共、だから落ち着いて。」

二人は、安堵の表情になり、一夏も二人の様子に安心したようだ。
一夏、ありがとう。
鈴の方を見ると、先程の余裕の表情と違い、苦虫をかみつぶしたような、表情をした。

「親父さん、元気にしているのか？まあ、あの人が元気じゃない所なんて、想像できないし。」

「うん、父さん、元気だと思う。」

鈴の元気が急になくなった。何故か、違和感を覚えた。

「それよりも、久しぶりに会ったんだし、一夏と一緒に話しでもしない？」

「うん、別に構わないわよ。」

一夏もこう言っているんだし、俺もそうするか。

「ーーーあいにくだが、蓮は放課後ＩＳの特訓があるのだ。放課後は、空いてないのだ。」

箒、ＩＳの訓練は構わない。構わないが、俺にもう少し自由をくれないか。

「ねえ、箒、少しぐらい休ませてあげたら？」

「一夏さん、蓮さんはまだまだ特訓が必要ですわ。代表戦までは、毎日訓練をして貰いますわ。」

さっきまでの苦い顔はどこへ行ったのか、二人の顔は喜びに満ちている。そりゃ、まあ、助かるけどさあ、もう少し時間をくれないか。

「じゃあＩＳ訓練終わったら行くから。じゃあね、蓮。」

鈴は、俺の返事を聞かずに行った。まったく、絶対待つしかないじゃないか。

「蓮、分かっていると思うけど、訓練が優先だぞ。」

「蓮さん、あなたが訓練している時間は、わたくしたちの時間でもあるのですわよ。それをお忘れなく。」

こっちもこっちで大変だ。まったく、やれやれだ。

第八話　食堂にて（後書き）

今回は少し長めになりました。
お気に入り小説登録数が１００件を越えました。
皆様、本当にありがとうございます。
次回も、ＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第九話　ＩＳ訓練そして……（前書き）

更新遅くなってすいません。では、第九話です。

第九話　ＩＳ訓練そして……

「二人共、とりあえず今日はこれで終わりにしよう」

「そうですわね」

「そうだな」

「よ、ようやく終わった～」

ＩＳ訓練の疲れが体にのしかかる。三人は、涼しい顔をしてこちらを見ている。この差は一体なんなのだろうか？

「まったく、普段鍛えていないからそうなる」

無茶を言うな。三対一の戦いをして疲れない方がどうかしている。まだ俺は、ＩＳに慣れてないのに。

「というか、一夏、何故お前はそちらにいる？」

おかしい。最初は一夏とペアを組んでいたのに、いつの間にか一人になっていた。

「べ、別にいいじゃない」

一夏よ、三対一は辛いんだ。お前も一回味わってみろ。死ねるぞ？

「ところで、一夏。今日は先にシャワーを使わせてくれないか？」

たまには、先にシャワーを浴びたいし、今日は疲れたから早く寝たい。

「蓮！」

バシュッとスライドドアが開いて、鈴が現れる。

「おつかれ。はい、タオルとスポーツドリンク。これでいいよね？」

「ありがとう、鈴。助かるよ」

うん。うまい。冷えてないのは、残念だが体に悪いからいいか。

「蓮さぁ、やっぱあたしがいないと寂しかった？」

「そりゃ、友人がいなくなるんだ。寂しいに決まっているだろ」

「そうじゃなくてさぁ」

やけに上機嫌だな。何かいいことでもあったのか？

「あー、ゴホンゴホン！」

やけにわざとらしい咳で鈴との会話を遮る箒。

「蓮、私は先に帰る。また、明日な」

「じゃあ、私も。シャワーだけど先に使ってもいいから」

「そうか、ありがとう。じゃあ、また後でな」

「うん。じゃあね」

今日は先にシャワーが浴びれる。良かった、良かった。

「ねぇ、蓮、今のどういうこと？」

ゾクッ、なんだ、この寒気は。俺の直感がここから逃げろと避けんでいる。

「ああ、鈴。実は、今一夏と同じ部屋でな。いつもは、一夏が先にシャワーを浴びているんだが、今日は先にして貰っただけだ」

「なんで、部屋が同じなのよ？」

「俺の場合、入学が特殊だから、別の部屋が空いて無かったんだ。だから、幼なじみの一夏の部屋に住まわせて貰っているんだ」

「それって、幼なじみなら良いのよね？」

「多分、大丈夫だと思うがそんなこと聞いてどうする？」

俺の言葉を聞くと、こちらに百万ワットの笑みを向けてきた。何故このタイミングでこんな笑みを浮かべるのだろう？

「ねぇ、蓮。幼なじみは二人いるってこと、忘れないでよ」

「忘れることはないが、幼なじみは三人だ。箒を忘れている」

「そんなことはどうでもいいの。それより、蓮また後でね」

走り去って行く鈴をただ見ているしか無かった。

「というわけで、一夏、部屋代わって」

「鈴、冗談はよしてよ？」

寮の部屋、夕食を食べまったりとくつろぎ、寝ようとすると鈴が現れ今の状況。
この世に神はいないのだろうか？いや、居たな。俺をこの世界に連れてきた奴が。

「いやぁ、一夏も幼なじみとはいえ男。いっしょに住むのは嫌でしょ。　気を遣ってのんびり出来ないだろうし。あたしはその辺りは平気だから、変わってあげようと思って」

「別に私は構わないわよ。蓮は私の幼なじみ。一緒に住むくらいどうってことないわ。そういう訳だから代わる必要はないわ」

二人共、黒い。オーラが黒い。なんか後ろの方に龍とか、虎が見える。この空気を誰かどうにかしてくれ。胃に穴が開いて死にそうだ。
というか鈴、その肩にある鞄は俺の幻覚だよな？

「鈴、一つ聞きたい」

「何？」

「その鞄は、お前の荷物か？」

「うん。そうよ。だってあたしは今日からこの部屋に住むんだから」

どうやら神は死んだようだ。今の鈴の言葉で一夏が纏っている黒いオーラが、黒桜並みに上昇した。

「ねぇ、鈴。今、幻聴が聞こえた気がするんだけどなんて言った？」

「だから、あたしがこの部屋で蓮と住むの」

鈴、君は凄い。一夏のオーラに対抗しているんだ。やはり、女性は強い。ＩＳが無くても。

「それに蓮とはあの約束があるし」

「へぇ、蓮。一体どんな約束をしたの？」

「えっと、確か……　鈴の料理の腕が上がっら毎日酢豚を作ってくれるだったよな？」

「れ～～～～ん」

「ぐはっ！？」

鈴、急に抱き着くな。お前はまがりなりにも、代表候補生。そんな力で急に抱き着かれたら、俺が死ぬだろう。

「鈴、抱き着くのは構わないが、そこまで力をいれないでくれ。受験で鈍った体だと耐え切れない」

「あ、ごめん。だけど、小学校の頃の約束だったからもう忘れていると思ってたから、嬉しくてつい」

「俺が約束を忘れるかよ」

鈴、嘘を言ってすまん。本当はお前に言われるまで忘れていた。

「それで鈴、料理の方はどうだ？出来るようになったのか？」

「後もう少ししたら、人前に出せるくらいになるわ」

「そうか、作れるようになったら俺に食べさてくれよ」

「勿論よ」

満面の笑みになって答える鈴。もし忘れてたら、多分頬をひっぱたかれたよな。鈴の性格からして。

「蓮。いい身分ね、幼なじみとそんな約束するなんて」

一夏から黒いオーラを通り越して殺気が飛んでくる。怖い、怖い、怖い。逃げなきゃ殺される。

「ねぇ、一夏さん？なんでそこまで怒っているんですか？」

「蓮。私は別に怒ってないよ。ただ、蓮の鈍感さに呆れているだけさ」

「じ、じゃあね。蓮。また明日」

「鈴、逃げるな。戻って来て。いや、戻って来てください！」

「蓮、とりあえず、君のその無節操から直して行こうか」

その言葉と共に俺は3時間一夏に説教されることになった。

そして次の日。俺は眠いのを我慢しながら、生徒玄関前廊下に来て、張り出されている紙を見た。

「どうやら、本当に神は死んだようだ」

その内容は『クラス対抗戦日程表』

一回戦の相手は二組……鈴だった。

第九話　ＩＳ訓練そして……（後書き）

今まで更新出来なくてすいません。今、携帯が壊れておりまだ直っておらず、しばらく不定期更新になると思います。読者の皆様、本当に申し訳ありません。

今回、一つアンケートをとりたいのですが、更識楯無を一巻終了後すぐに出すのか、二巻終了後に出すのか決めて貰いたいと思います。

一巻終了後に出して貰いたい人は１

二巻終了後に出して貰いたい人は２

期間は、一巻の内容が終わるまでとさして頂きます。

最後に読者の皆様、このような駄文を読んで頂きありがとうございます。これからも頑張って行きたいと思いますので、ＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十話　クラス対抗戦　前編（前書き）

今回はかなり長いです。

第十話　クラス対抗戦　前編

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。世界初のＩＳを使える男と代表候補生という今までに例をみない組み合わせに、アリーナは全席満員。アリーナに入れなかった生徒や関係者は、モニターで観戦するという事態。まあ、そんなことは俺に関係ない。それよりも俺はこの試合負ける訳にはいかない。負けたら、あの時の悪夢が……。
って、考え事をしている暇はないか。鈴とそのＩＳ［甲龍］が試合開始の時を静かにまっている。

［それでは、両者、規定の位置まで移動してください］

アナウンスと共に、俺と鈴は空中で向かい合う。

「蓮、お互い正々堂々と戦いましょう」

「そんなの当たり前だろう？」

「それもそうよね。ところでさぁ、蓮。賭をしない？」

「賭？」

「あたしが勝ったら、蓮はあたしと一緒に住んで？もしあたしが負

けたら、う～んまぁ、それは後で蓮が決めて？」

「なんでそんな賭をする必要があるんだ？」

「べ、別になんでもいいじゃない。それとも何？あたしに勝つ自信がないの？」

鈴が余裕たっぷりの表情で言ってくる。完全にこちらをなめているな。なら俺はその余裕を崩すまでだ。

「そこまで言われて黙っていられるほど俺は大人じゃない。それに俺は負けられない。あの文化祭の時の屈辱は二度と味わいたくないからな」

「ああ、あの時の。別にいいじゃない。似合ってるんだし」

「俺は男だ。あんな男の尊厳を踏みにじる事はしたくない」

「ふーん。まあいいわ。お互い頑張りましょう」

「望むところだ」

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れると同時に俺と鈴は動いた。

ガギィンッ！！

俺のエクスカリバーを青竜刀と言うには、あまりにも掛け離れているそれに弾かれる。

「へぇ～、見えない剣ねぇ。確かに珍しいけど対処出来ないほどのものではないね」

鈴は両端に刃の付いた、それをバトンのように回す。縦横斜めと攻撃する角度を自在に変化させている。

（このままだとまずいな。一辺離脱して……）

「甘い！」

ばかっと肩アーマがスライドして開く。そして何かが光った瞬間、突然衝撃が訪れる。

「蓮、見えない武器を持っているのは、蓮だけじゃないのよ」

その瞬間、もう一度衝撃が訪れる。くそっ、どうすればいいのか。

Ｓｉｄｅ　一夏

「なんだあれは……？」

一緒に見ていた箒が呟く。
正直私も同じ気持ちだ。まるで見えない砲撃が当たっているように見えた。あれは一体なんなのだろうか？

「『衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して撃ち出すー」

嘘。それじゃ勝ち目がないじゃない。見えない砲弾を避けるなんて無理に決まってる。
しかしそんな考えを箒の言葉で打ち消される。

「蓮、いや、嘘だろう？あの攻撃をかわすなんて！」

咄嗟にモニターを見ていると、そこには衝撃砲をかわしている蓮の姿があった。
蓮、流石に非常識よ。見えない砲弾をかわすなんて。
でも、もしかしたら勝てるかもしれない。そんな期待が私の中で巡った。

「流石に自信を無くすわよ。衝撃砲《龍砲》をＩＳに乗ってから一年もたってない蓮がかわし続けるなんて。まったく見えない砲弾をかわすって理不尽だわ」

かなりきついな。見えない砲弾はまだしも、砲身が見えないのはきつい。しかも、砲身斜角は制限なし、真上真下はもちろん真後ろまで展開できる。斜線は直線とはいえ、鈴のレベルが高くて弱点にならない。
普通ならかわせない攻撃をかわせる理由は、直感のスキルに加え、ＩＳの性能、俺自体の運動能力、ハイパーセンサーによる空間の歪み値と大気の流れを探ることによってかわしている。

（今はまだしもこのままだと負けてしまう。あまり使いたくないが、あれを使うしかないか）

俺の持っているもう一つの剣。千冬さん曰く、「確かに強いが、リスクがでかい上に下手をしたら相手を傷つけてしまうものだ。あまり使わない方がいい」らしい。
だけどこのままだと負ける。鈴は力の出し惜しみをして勝てる相手ではない。ならば、全力で行くだけだ。

「鈴」

「なによ？」

「俺も力の出し惜しみをしないで本気でお前と戦う」

「当たり前じゃない。そんなこと。いいわ、格の違いを見せてあげるわよ」

俺はもう一つの剣を展開させようとする。

ズドオオオン！！！

剣が展開されようとした瞬間、アリーナに大きな衝撃が走った。
衝撃砲のそれとは、範囲も威力も桁違い。ステージの真ん中を見ると、大きな穴が空いている。
どうやら、アリーナの遮断シールドを突破してかた衝撃らしい。

「一体、　何が起こって……」

「蓮、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！」

どうやら、かなりまずいことになっているらしい。この場を離脱しようとした瞬間、ハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

ーステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされてます。

まじかよ。アリーナのシールドはＩＳのものと同じ。つまりあれは、それを破壊する力を持ったＩＳ、しかもこちらをロックしている。
かなり、やばいな。

「蓮、早く！」

「お前はどうやって逃げるつもるだ？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「お前、あのＩＳはかなり危険だ。お前をほって逃げれるか！」

「馬鹿！蓮、まだアンタはあたしより弱いのよ。だから、早く逃げなさい」

まったくの正論だから言い返せない。

「あたしだって最後までやり合うつもりはないわよ。第一、こんな異常事態、すぐに学園の先生たちがやってきてーー」

「鈴！危ない！」

咄嗟に俺は反応して、鈴をその場から待避させた。その瞬間、さっきまでいた空間に熱線が通っていった。

「あのＩＳのビーム、セシリアのより出力が高い」

だか、なんだか違和感を感じる。まるで本来の武器とは別の物を使っているように見える。

「鈴、大丈夫か？」

「ええ、蓮のおかげで助かったわ」

「来るぞ！」

相手から、ビームの連射が放たれる。
その際、煙が晴れ、相手のＩＳが見える。

「なんだ？これは？」

姿形から既になにか違う。そのＩＳの手は異常に長く、つま先まであり、首がない。肩と頭が一体化しているみたいだ。
そして、なにより他のＩＳと違い、全身装甲である。

「お前は、何者だ」

「……」

予想していた通り無言。まあ、普通答える馬鹿はいない。

『白井くん！凰さん！早くアリーナから脱出してください！今から

すぐそちらに先生たちがＩＳで制圧に向かいます』

山田先生の声が聞こえる。その声には、いつもと違い、威厳が感じられる。

「先生」

「なんですか？」

「先生たちがこちらに着くまでどのくらいかかりますか？」

「５分か、そのあたりだと思いますけど？」

「そうですか。じゃあ、俺はあのＩＳをそれまで止めておきます」

５分という時間は短いがあのＩＳだと、その間に観客に被害が及ぶ可能性が高いだろう。

「すまない。鈴。力を貸してくれ」

「当たり前よ。アンタが戦うのにあたしが戦わないで逃げるなんて選択肢はないわよ」

「そうか、ありがとう」

『白井くん！だ、ダメですよ！生徒さんにもしもの事があったらー

ー』

言葉はそこまでしか聞けなかった。敵ＩＳがこちらに向かって突進。そしてそれを避ける。

「どうやら逃げれそうにないな」

「みたいね」

「鈴、衝撃砲で援護を頼む。そのすきに俺が攻撃する」

「分かったわ」

「よし、行くとするか」

俺たちは、敵ＩＳに向かって飛び出した。

「もしもし！？白井くん聞いてます！？凰さんも聞いてますー！？」

山田先生はかなり焦っているようだ。

「山田先生、諦めろ。あの二人。特に白井は無理だ。あいつを説得するのはかなり難しい」

「お、お、斑村先生！二人は生徒なんですよ！もしものことがあったらどうするですか！？」

「落ち着け。あの二人なら大丈夫だ。それよりもコーヒーでも飲め」

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「山田先生、何故ここに塩が？」

「それは私が置いたからだよ。ちーちゃん」

どうやら、私は幻覚を見ているようだ。ここにいるはずのない奴がいるからだ。

「どうしたの？ちーちゃん。もしかしてれっくんのことが心配？」

「何故、お前がここにいる？束？」

「前、言ったよね？ちーちゃん。今度ＩＳ学園に行くって？」

「だからって、私に何も言わずに来るな！」

まったく、こいつはいつもこんなんだ。少し、矯正した方がいいのだろうか？

「えっ、束さんってあの束さん！？どうしてこんなところに！それ

よりも、やっぱり口ではそういいながらも実は白井くんを心配してーー」

山田先生は少し冗談が好きなようだ。

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？それって塩が入っているやつじゃ……」

「どうぞ」

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

「鬼だね。ちーちゃん」

鬼？なんのことだ。私はただ可愛い後輩にコーヒーを入れてあげただけだ。

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、ーーこれを見ろ。」

私はセシリアにアリーナのステータスを見せる。

「遮断シールドがレベル４……？しかも扉も全てロックされてーーあのＩＳの仕業ですの！」

「ああ、今、三年生が解除に当たっている。早くても５分はかかる」

「そうですの。待っていることしかできないなんて……」

「まあ、どちらにしろお前を突入隊に入れるつもりはない」

「な、なんでですの！」

「お前のＩＳは一対多向きだ。多対一では邪魔になる」

「そんなことはありませんわ！」

「では、連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどうやって使う？味方の構成は？ーー」

「も、もう結構です！」

まったく、現実を良く見るべきだ。まあ、私もこれくらいの頃は無茶をしたが。

「それより一つ聞きたいのですが、そちらの方は？」

「こいつは、私の友人だよ」

「そ、そんな！ちーちゃん、私を愛してるって言葉は嘘だったの！」

「私はそんなことを言った事はない！」

「先生にそんな趣味が……」

「違うぞ、オルコット。私にそんな趣味はない」

まったく、束がいると調子が狂う。
それよりも蓮、必ず無事で帰ってこいよ。

「くそ、また失敗か！」

敵ＩＳに攻撃を仕掛けること四回目。その全ての攻撃を避けられている。

「蓮、もっとちゃんと狙いなさいよ！」

「やってる！」

普通ならかわせない攻撃を全身についているスラスターの出力で、一秒もかからず離脱している。

（どうしたらいいんだ？）

敵ＩＳの攻撃をくらい、シールドエネルギーがかなり無くなっている。

「蓮っ！」

「分かってる」

敵ＩＳのビーム攻撃を避ける。
正直このままだと、５分も持たない。

「鈴、あとエネルギーはどのくらいだ？」

「後、百八〇ぐらいよ」

かなり減ってはいるが、それでも俺よりはましだ。

「かなり厳しいわね……。今の火力でアイツを止めるのは絶望的よ」

「なあ、さっきから疑問に思っていたんだが、あいつの動きおかしくないか？」

俺の感じている違和感の一つ。あいつの動きは人間離れしている。もし俺の推論が正しければ……。

「鈴、もしかしてあのＩＳ無人機じゃないのか？」

「無人機？無人機なんてありえない。ＩＳは人が乗らないと絶対動かないわ」

確かに教科書でも見た。だが、それが本当かは分からない。黙っていれば、誰にもばれないのだから。

「もし、あのＩＳが、無人機なら勝てる」

「へっ……？」

「無人機ということは人が乗ってない。つまり全力で攻撃できる」

俺の武器の威力は高すぎる。人に対して使えば、相手を殺してしまうかもしれない。でも、無人機ならそういう心配をしなくてもいい。

「仮にあれを無人機として、どうするの？」

「まず、鈴、俺が合図したら、全力であいつに向かって衝撃砲を撃て」

「いいけど、当たらないわよ」

「それでいいのさ」

秘策があるんだから。

「よし、行くぞ」

俺は突撃用意をする。その手には、風王結界を纏っているエクスカリバーがある。

「今だ！鈴、やれ」

「わ、分かったわよ」

両腕を下げ、肩を押し出す格好で衝撃砲を構える鈴。
そして俺は衝撃砲の射線上にでる。

「ば、ばか！早くどきなさいよ！」

「早く、撃て」

「どうなってもしらないわよ」

後ろから高エネルギー反応が出る。
俺は風王結界を解除する。
風王結界はかなり応用のきく能力だ。剣に纏わせれば見えなくし、指向性を持たせれば攻撃も出来る。そして今は風王結界の風を身に纏っている。指向性を持ったそれは瞬時加速の使えない俺でも一回だけ、それと同等の効果を発揮する。そして風王結界は衝撃なんかを風に変換することができる。
それは、つまり、衝撃を与えればより力を増すということだ。
ドンッ！と背中に衝撃砲の砲撃がぶつかる。
その砲撃を風に変換、一気に加速した。

そして俺は、右手に握っているエクスカリバーを戻す。そして俺は、騎士王の持っているもう一つの剣を展開する。
その剣の名前はカリバーン。その能力は至って単純。エネルギーを剣に注ぎ込み、攻撃力に変換するもの。威力だけなら、千冬さんの白騎士を越える場合もある。

「これで、終わりだ。真名開放『カリバーン』（勝利すべき黄金の剣）」

俺のＩＳのエネルギーのほとんど全てを注ぎ込んだ一撃は、シールドを切り裂き、敵ＩＳの右手を切り落とす。
しかし、突然左手で捕まれる。そこから、熱反応。どうやらビームを放つようだ。

「蓮！」

鈴の叫び声が聞こえる。だが、そう簡単にはやられないさ。

「セシリア！今だ！」

その瞬間、ブルー・ティアーズの四機同時狙撃が敵ＩＳを撃ち抜く。
遮断シールドはさっき破壊した。
敵ＩＳは地上に墜落する。シールドエネルギーがない状態だとひとたまりもないだろう。
俺の真の目的は認識外からの狙撃。
いくら、機械でもあれは避けられない。

「流石、セシリアだ」

「いえ、結構ぎりぎりでしたわ」

「まあ、それはともかくこれで終わりーー」

ーー敵ＩＳの再起動を確認！警告！ロックされています！

しまった。まだ倒しきれて無かったか！
片腕しかない敵ＩＳ。だが、その手は確実に俺を狙っている。
そして、俺はなけなしのエネルギーを全てシールドに注ぎ込んだところで、ビームに飲み込まれてしまった。

第十話　クラス対抗戦　前編（後書き）

今回の前編は原作を基準にさせて貰いました。後編は、原作とまったく違う展開になります。
話は変わりますが、お気に入りが二百を越えました。
こんな駄文を本当にありがとうございます。

では、次回もＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十一話　クラス対抗戦　後編（前書き）

5月23日　修正

第十一話　クラス対抗戦　後編

危なかった。さっきの攻撃を直接喰らっていたら、多分死んでいただろう。まさか、ＩＳが再起動するとは予想外だ。というか鈴たちは大丈夫なのか？

「鈴！大丈夫か！？」

鈴に声をかけるが、返事が返って来ない。まさかあいつにやられたのか？俺はさっきまで鈴のいた場所を見る。
そこにはあの無人機がいる。しかし何か様子がおかしい。

「武装変更　ゲイ・ジャルグ、ゲイ・ボウ」

その瞬間、無人機の両手に赤色と黄色の槍が展開される。
嘘だろ？あの槍は、ゲイ・ジャルグにゲイ・ボウ。ＩＳとの相性は最悪だ。漂っていた煙が晴れ、鈴の姿が見える。

「鈴！早く逃げろ！その槍は危険だ！」

早く逃げてくれ、鈴。だが、俺の期待をよそに鈴は動かない

「『ゲイ・ジャルグ（破魔の紅薔薇）』」

「避けろ！鈴！」

俺の考えが正しければ、あの槍は確実にシールドエネルギーをかき消す。
そして俺の予想通り、鈴のＩＳのシールドエネルギーがかき消される。

「！？　衝撃砲！」

シールドエネルギーを掻き消された鈴は咄嗟に衝撃砲を撃ち、槍を僅かに逸らして槍の攻撃から逃れる。だが、その攻撃でエネルギーが無くなりＩＳが待機状態になる。

「来るな、来るなぁぁぁぁ」

くそっ！俺はまた助けられないのか。あの時と同じように。
動け。動け、動け、動け、動け。
俺の体よ、動いてくれ。
また、友達を失うなんて嫌だ！
俺の心が憎悪の念で満たされる。
そして、俺は本能のままに叫ぶ。

「『アヴァロン』（闇に染まりし理想郷）」

俺の視界が闇で埋めつくされる。
そして薄れゆく意識の中、声が聞こえた気がする。

「喜べ　少年　君の願いはようやく叶う…！！」

おそらく、実際にこの声の人と会えば絶対に嫌悪感を表すだろう。
しかし、今はそんな感じがしない。その声に僅かな期待をかけながら、俺の意識は消えた。

蓮が突然再起動したＩＳにやられた。

「嘘でしょ？」

あたしの体は動かない。
そしてあのＩＳがあたしの方に近づいてくる。
そして、ふと、その歩みを止めた。

「武装変更　ゲイ・ジャルグ、ゲイ・ボウ」

その瞬間、二つの槍が展開される。
その槍はどこか不吉な感じがする。

「鈴！早く逃げろ！その槍は危険だ！」

蓮の声が聞こえる。
だけど体が動かない。

「『ゲイ・ジャルグ』（破魔の紅薔薇）『」

「避けろ！鈴！」

その槍がシールドに触れた瞬間、シールドが消えた。嘘でしょ？シールドを掻き消すなんて。このまま当たったら死んじゃう。

「！？　衝撃砲！」

本当に偶然、衝撃砲を出すことに成功した。
そのおかげで槍はあたしに当たらなかった。
だけど、そのせいでＩＳが待機状態になる。

「来るな、来るなぁぁぁぁ！」

近づいて来るＩＳの前にあたしはそれしか言うことが出来なかった。
あたしが死を覚悟した瞬間、蓮が何かを叫ぶ。
「『アヴァロン』（闇に染まりし理想郷）」
あたしは咄嗟に蓮の方を向く。
そこには、いつものセイバーでは無く、黒い、どこまでも黒のＩＳがいた。
「どういうことだ！束！」
「ちーちゃん。私にも分からないよ。とりあえず解析してみないと」
先程まで、蓮がいたところに黒いＩＳが現れた。一体どういうことだ？
「嘘！ありえない、こんなことって……」
「どうした？束？」
「ちーちゃん、あれは有り得ないよ。あれ、セイバーを元にまったく違うＩＳを作りあげてる。」
「なんだと！」

確かに、束の言う通り有り得ない。ＩＳの初心者である蓮がそんなことできるはずがない。

「えっ、それってそんなに有り得ない事なんですか？」

「有り得ないよ！だってＩＳを元に別のＩＳを作りあげるのは、私しかできないことなのに！」

「しかも、それをまったくの初心者である蓮が、何の設備も無しにやってのけているんだ」

あいつは、昔から理不尽だと思っていたがここまでとは思っていなかった。

「なあ、束、あのＩＳの名称はなんだ？」

「セイバーオルタ、セイバーオルタだよ、ちーちゃん」

セイバーオルタか。とりあえずこの件が終わったらあいつに色々聞かねばならんな。

「ここはどこだ？」

俺は今、真っ黒の世界にいる。
あの時とまったく逆の世界。

「やっと会えたね」

「誰だ！」

声のした方を向くと俺とまったく同じ姿をした奴が現れた。

「誰って酷いな。ぼくは、この世界に君が現れた時からずっと君と居たのに」

「本当に何者だ？」

まさか俺って二重人格だったのか？

「二重人格ねぇ。近いけど正解ではないね。まあ、君の知識で正解に近いのはペルソナとかそんなんだね」

「お前が俺のペルソナ？」

この世界に召喚器あるのか？

「違う、違う。ぼくはペルソナじゃないよ。だけど、これは確か。君はぼくで、ぼくは君だ」

成る程、ようするにこいつはもうひとりの遊戯みたいってことか。

「で、なんのようだ。何故、俺をここに呼んだ？」

「それは、君を助けるためだよ」

「俺を助ける？」

俺に言わせれば、こいつは俺を助ける義理は無いはずだ。俺が死ねば、自分が出ていけるのに何故助ける？

「当たり前でしょ？ぼくを受け入れてくれた君を助けない道理はないよ」

「俺はお前を受け入れた記憶がないが？」

「君は覚えてないけど君はちゃんと受け入れてくれたよ。世界に嫌われていたぼくを」

世界に嫌われてる？何故こいつが？

「ぼくは君に救われた。だから、今度はぼくが君を助ける番だ！」

こいつの笑顔はどこか狂っていた。性別は分からないが、女だったら間違いないなく「ヤンデレ」、そんな笑顔だ。

「じゃあ、鈴を助けてくれるのか？」

「うん、そうだよ。だから、君は安心して眠ってて」

また俺の意識が遠のいていく。

「鈴のことを頼むぞ」

「うん、分かった」

その言葉を聞き、俺は眠った。

「久しぶりだなぁ」

現実世界に来たの何年ぶりだろ。あの時、世界から放り出された時

に諦めた世界が見えるなんて。蓮には感謝だ。

「って、あそこにいる女の子危ないな。助けないと」

ぼくは、女の子を刺そうとしている黄色の槍を弾く。

「大丈夫かい？」

「蓮？どうして動けるの？ていうか、そのＩＳなに？」

「君、蓮のこと知ってる？君の名前は？」

「凰　鈴音だけど、アンタほんとに蓮？」

「君の知ってる蓮じゃないけど確かにぼくは蓮だよ」

「蓮、二重人格なの？」

「近いけど、少し違うよ。それよりあのＩＳを倒せばいいんだね？」

「何言ってんの！あの槍は危険なのよ。勝てるはずないじゃない！」

「勝つよ。勝ってみせるよ。あのＩＳに。鈴は少しの間、離れていて」

「わ、分かったわよ」

鈴がこの場から離れる。これで邪魔者はいなくなった。ぼくは敵ＩＳの前に立つ。

「ここからは、ぼくが相手だよ。君は一体何分持つかな？」

さあ、楽しい戦いの始まりだ。

キンッ、ガキンッ！

ぼくの剣が敵ＩＳの槍と当たる。
成る程、彼の知識にあった二本の魔槍の遣い手というのは、本当のようだ。
初見なら確実にどちらかの槍が、フェイクと感じるだろう。

「ははっ、君はおもしろいね。二本の槍を使うなんて」

「……」

相手は無言。まあ、当然か。
それよりも楽しいなあ。　まだ強い奴沢山いたんだ。

「これで、どうだ！」

三度目になる踏み込みが阻まれる。

「……」

敵ＩＳが右手で刺突し、縦横無尽に振り払う。
両手で操っていると言われてもおかしくない攻撃。
連撃の合間にできる隙に入り込もうとしても、左の短槍に牽制され防がれる。
本当に楽しい。こんな戦い久しぶりだ。
だけどこのままだとじり貧だしどうしようか？あっ、思いついた。
あいつを倒す方法。
危険だけど、やるしかないよね。

「君との戦い、面白かったけど次でおしまいだ。全力で来ないと負けるよ？」

敵ＩＳはゲイ・ジャルグを前に出す。
作戦通りあとはあいつが真名開放をするのを待つだけ。

「『ゲイ・ジャルグ』（破魔の紅薔薇）『」

よし、来た。ぼくはその攻撃を体に当たらないように避け、槍がＩＳの装甲に刺さる。
ＩＳのエネルギーが急速に下がるがぎりぎり持った。
賭けには勝った。この勝負、ぼくの勝ちだ。

「その槍、深く刺さり過ぎて抜けないみたいだね。これだと逃げれないなあ」

ぼくの言葉を聞き、敵ＩＳが逃げようとする。
だけどもう遅い。

「真名開放」

この言葉を言った瞬間、空気が変わる。ピーンと張り詰めた空気。
この世界でもやはり、受け入れられないか。ぼくを受け入れてくれるのは蓮だけみたいだね。

「『エクス』（約束された）」

剣に力が集まる。その色は蓮のそれと違い、黒色をしている。世界から否定されたぼくに相応しい色。

「『カリバー』（勝利の剣）」

そして、剣より膨大な力が発生し、敵ＩＳを飲み込む。そしてついに、敵ＩＳは倒れた。

「どうやら、ぼくの勝ちみたいだね。じゃあ、ぼくはしばらく寝るか。鈴、後はよろしく」

そしてセイバーオルタは元のセイバーに戻り、ＩＳは解除され蓮が地面に横たわる。

そして、クラス対抗戦は意外な形で幕を閉じた。

第十一話　クラス対抗戦　後編（後書き）

今回、少し中二病みたいでしたかね。
物語の都合上こうなりましたが……

今回の話が終わったので、プロローグを少し修正するので投稿が遅れるかもしるません。

次回もＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十二話　クラス対抗戦　後日談

「知らない天井だ……」

「何を言ってる。この大馬鹿者！」

「いってぇ～～～」

怪我人に対して暴力を振るわないで欲しい。
確かに、若干ふざけてはいたが。

「まあ、そんなことはどうでもいい。それより何だ、あのお前が使った黒いＩＳは？」

黒いＩＳ？俺のＩＳは黒では無いはずだが？

「どういうことですか？」

「何も覚えてないのか？まあ、いい。事情は後で聞こう。それより今は動くな。全身に軽い打撲がある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

地獄ねえ。生きてたんだから、そのくらいは我慢しよう。それよりも、千冬さんの言っていた、黒いＩＳ。一体どういうことなのだろうか？

「織斑先生。さっき言ってた黒いＩＳについて分かっていることを教えてくれませんか？」

「ほとんど何も分かっていないが、ＩＳの形状はお前のセイバーを黒くしたもので、名称はセイバーオルタだ」

「セイバーオルタ……」

「どうした？何か知っているのか？」

「いえ、別に。何でもありません」

嘘だろ。何故セイバーオルタがこの世界にあるんだ？いや、確か無人機ＩＳが再起動した際誰かと会った。セイバーオルタはアンリ・マユを受け入れた際に属性などが反転したセイバーの可能性の一つ。確かあの時会ったあいつは、自分が世界に嫌われていると言っていた。

つまりあいつは、アンリ・マユまたはそれに近い存在。だとするとあの紳士的口調は、俺の属性が反転したものということか。

「そうか、ならいい。私は後片付けがあるから仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

千冬さんは真面目だな。俺もあんな大人になりたいな。

「あー、ゴホンゴホン！」

どうやら箒が来たらしい。あのわざとらしい咳は箒しかいないからな。

「箒、来てくれてありがとう」

「う、うむ」

腕組みをしている幼なじみはどこか不機嫌そうである。

「それよりもだな、蓮。お前は何を考えているんだ！一歩間違えていたら死んでいたんだぞ。分かっているのか！」

急に怒り始めた。怒られるとは思っていたが、まさか来て早々にされるとは思わなかった。

「ほ、箒さん？一応勝ったんだから、そこまで言わなくても……」

「あんなもの、勝ったとは言わん！あの黒いＩＳになっていなかったら、死んでいた！そうだろう？」

確かにあの時あいつに会っていなかったら、鈴も俺も死んでいたかも知れない。そう考えると箒たちには心配をかけたよな。

「箒、ごめん。心配かけて」

「なっ……！べ、別にしていないぞ、お前の心配なんか！」

そこは心配していたと言うべきだろ。

「と、とにかくだ！これで今までの訓練が無駄でないことが分かっただろう。これからも続けといくぞ。いいな？」

「ああ、もちろん」

「そうか。わかればいい。では私はこれで」

「じゃあ、また明日」

箒はスタスタと保健室から出て行った。
もう少しいてくれたらいいのに。
暇だし、寝るとするか。

「……」

誰か来たのだろうか？人の気配がする。

「蓮……」

「何の用だ？鈴？」

「蓮！？起きてたの！？」

「ああ、ついさっき」

「もう少し寝てなさいよ！」

なんだよ。それ。理不尽じゃねえか。

「結局、試合は無効なのか？」

「そりゃそうでしょう」

良かった。これであれをする必要が無くなった。

「なあ、鈴。こっちに戻ってきたということは、お店をやるのか？
あの味はなかなか味わえないから、楽しみにしているんだ」

「あ……。お店は……しないんだ」

「ど、どうして？」

「両親、離婚しちゃったから……

「う、嘘だろ？」

あんなに仲が良かったのに何があったんだ。
鈴の顔を見るに冗談ではないんだろう。

「あたしが国に帰ったのも、そのせいなんだよね」

「そうか……」

鈴の両親が離婚した事実はかなりこたえた。
あんなに仲の良かった二人にはもう会えないと思うと。
そして何よりもつらいのは、鈴だろう。自分の家族が突然離れ離れになったのだ。つらくないはずがない。

「なあ、鈴」

「ん、　なに？」

「今度どこかに行かない？」

「え！？もしかしてデー」

「一夏と三人で一緒に」

「……」

先程までの笑顔はどこえやら、今はかなり不機嫌だ。

「行かない」

鈴、俺がいるから行きたくないのか。確かに遊びに行くのだったら同性の方がいいよな。

「あ、あんたと二人なら行ってあげても……」

「蓮さん！大丈夫ですか？わたくしが看病に……あら？」

セシリアの言葉が途中で止まる。鈴がベッドの傍にいるのを見たからだろう。

「どうしてあなたが……？　二組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「何言ってんの。こっちこそあんたにそんなこと言われる筋合いはないわ。ていうか、あんたなんであの時、あたしを助けてくれなかったの？」

「し、仕方ないじゃないありませんの！あのとき遮断シールドが発生していて近付けられなかったんですわ」

「二人とも喧嘩はやめろ」

まったく保健室で暴れないでくれ。

「うっ、ごめん」

「少々大人げなかったですわね」

二人とも分かってくれたか。

「だけど、あんたは気に入らない」

「奇遇ですわね。わたくしもそう思っていたところでしたの」

「まったく、あんたみたいに気取ってるやつは好きじゃないのよ」

「わたくしもあなたのような品のない人は好きではありませんの」

「何よ！」

「何ですって！」

「本当にいい加減にしてくれ」

蓮のその言葉には酷く哀愁が漂っていたそうだ。

「まったく、厄介なことになったものだ」

蓮はセイバーオルタについてなにか知っているのだろう。まあ、本人が話すつもりがないなら、別に構わんが。
それよりも厄介なのは束の方だ。まさか束があんなことを言い出すなんて。

「束。あの無人機ＩＳについて調べておいてくれ」

「当たり前でしょ、ちーちゃん。あんな不完全なものを許すわけにはいかたないし」

「不完全？お前以外が作ったものにしてはいい方だと思うが」

「ちーちゃん。確かにあのＩＳは私以外の人間が作ったにしてはい

いほうだけど、あの槍を十分に使えないレベルじゃ駄目だね」
「お前基準で考えたらほとんどそうなるだろう？まあ、頼んだぞ」
「うん、分かった。それとちーちゃん、れっくんの機体については調べておくね」
「珍しいな。お前がそこまでやる気を出すなんて」
「そんなの当たり前だよ。れっくんは私が興味を持てる、最初にして最後の男性だよ。
それにあの戦いを見てさらに欲しくなっちゃったし」
「別に私は構わないが、白井はライバルが多いぞ。大丈夫なのか？」
「ますます燃えてきたよ。ライバルなんて関係ない。れっくんを手に入れるのは私だから」
そんな束の言葉に、苦笑するしかない千冬だった。

やはり、思い出したくないな。
それよりも、蓮の守りをもう少し固めておくか。下手をしたら、束が連れていきかねん。
「本当に厄介事だらけだ」

千冬は本当に厄介そうに言った。

「あっ、蓮。遅かったね。体、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも一夏、なんで廊下にいる？」

まさか、俺を部屋の前で待っていたわけではないだろうし、何かあったのだろうか。

「ああ、引っ越しだよ。引っ越し。部屋が空いたから」

「そうか。もう一ヶ月たったからな。寂しくなるな」

部屋に入ってみると、一夏の私物が無くなっている部屋だった。一夏の私物が無い分、部屋はかなり広く感じる。

「じゃあ、また明日」

「じゃあな」

一夏がいなくなった部屋。普段居た一夏が居なくなったので、かな

り違和感がある。

「寝るか。することないし」

ベッドのなかに入ろうとすると、コンコンと扉を叩く音がした。
まったく一体誰だ。このタイミングで来た奴は。

「はい。どちらさまで……って箒じゃないか。一体なんのようだ？」

「……」

無言かよ。俺なんか怒らせるようなことしたか？

「中に入るか？」

「いや、ここでいい」

「……」

「……」

箒、お前は何をしに来たんだ。

「用がないなら、早く帰った方がいいぞ」

「よ、用ならある！」

廊下で大声を出すなよ。千冬さん来たらどうする。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

来月に行われる個人トーナメント。生徒の自主参加の個人戦で学年以外での区切りは特に無いそうだ。

「わ、私が優勝したら」

箒の顔は真っ赤になっている。

「つ、付き合ってもらう！」

「はあっ？」

どうやら俺はまた面倒な事に巻き込まれるらしい。俺、卒業したら平穏に暮らしたい。

第十二話　クラス対抗戦　後日談（後書き）

今回遅れて申し訳ありません。
リアルのほうが忙しくて更新できませんでした。

アンケートは1だったので、次の話は更識楯無になります。

今回も読んでいただきありがとうございます。
感想や意見も受け付けております。
これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

閑話　更識楯無ＶＳ白井蓮（前書き）

今回戦闘シーンは三人称です

閑話　更識楯無ＶＳ白井蓮

「やっと授業が終わった」

授業が終わり、俺は今寮に帰っている途中だ。今日は珍しく訓練が無いのでのんびり過ごそうと思っていると、突然目の前が真っ暗になった。

「！？」

「だーれだ？」

聞こえてきた声は、どことなく大人びた声。
どこかで聞いたことのある気がしないでもないが、思い出せない。

「はい、時間切れ」

そう言って手を離してくれたので振り向くとそこには、青髪の女の子だった。
あ、思い出した。確かこの学園の……

「生徒会長さん？」

「正解♪」

やはり、そうか。どことなくカリスマもあると思って言ってみたが、正解のようだ。

「……で、その生徒会長さんがここ数日俺の後をつけていたみたいですが、それについて納得のいく説明を」

「バレてた？」

気配自体は隠していたけど、決して気づけないようなレベルではない。

「理由を説明するなら、キミはあの黒いＩＳを出したでしょう。だから、君の護衛をしているわけ」

成る程。あんなイレギュラーを起こしたら狙われるな。そういえば、この学園に置いて生徒会長は最強でないといけないらしい。つまり彼女はこの学園最強。なら一つお願いしよう。

「生徒会長さん。お願いがあります」

「なに？付き合ってとかは駄目だよ？」

「違いますよ。ただ、俺とＩＳで模擬戦をしてください」

「……は？え～とそれは、キミも生徒会長の座を狙ってるの？」

「いやいや。俺じゃ、逆立ちしたって生徒会長さんには勝てないですよ。ただ、単純に学園最強っていうのに興味を抱いただけです」

本当は別の理由があるけど、今言う必要はないな。

「うん、いいよ」

あれ、結構あっさり許可してくれた。
まあ、許可してくれた訳だからいいか。

「じゃあ、お願いします」

「こちらこそ。あ、後、私の名前は更識楯無。楯無と呼んでもらおうかな。たっちゃんでも可」

「じゃあ、楯無先輩で」

「まあ、妥協点かな」

そんなことをいいながら、アリーナに向かった。

「準備はいい？」

「ええ、準備は万全です」

「それじゃ、始めるわよ」

楯無の言葉と共に槍を繰り出す。
その一撃は、達人のそれと比べても遜色ないものである。
だか、それを蓮は、打ち払う。

「やるわね。ならこれはどう」

さらに速度を増した三つの突きは、達人ですら見切ることが難しい。
一瞬で来る突きを、直感のスキルの力でぎりぎり避ける。

「これは、かなりきついな」

「今のを避けるなんて、流石ね。でも次は避けられないわよ」

繰り出すは　五つの突き。

直感のスキルを持ってしても、それを避けることはできず喰らってしまう。

「くっ……！？」

「もうおしまい？」

楯無に言われ、改めて実力の差を感じる蓮。
だが、蓮には一つだけ秘策があった。

「まだまだ続くわよ」

飛来してくる五つの突き。
蓮は冷静に剣を構えなおす。
その両腕には蒼銀の何かを纏っている。
そして、五つの突きを先程とは比べものにならない速度で弾き返す。

「嘘！？」

楯無の顔が驚愕の表情になる。
先程は対応することが出来なかったのに、いきなり五つの突きをかわされたのだ。驚かないほうがおかしい。
もちろんこの急変ぶりには秘密がある

セイバーの持っているスキルの一つに魔力放出というものがある。
魔力放出とは、手にした武器や自らの四肢に魔力を高圧で蓄積し、任意のベクトルで瞬発的に噴射することで、運動能力を格段に高めるという荒業である。
だが、この世界には魔術の概念が存在しない。そのため魔力も存在しない。
本来ならただの無駄スキルとなるのだが、神の配慮によってこのスキルは改変されＩＳ内に存在している。
そしてＩＳの技能の一つである瞬時加速（イグニッションブースト）というものがある。
この技能はスラスターでエネルギーを圧縮し、放出するものである。
この技能は魔力放出とかなり似通っている。
そこに目をつけた神は、イグニッションブーストを武器や四肢での使用を可能とした。
つまり、『イグニッションブーストの局所的使用』である。
これにより、セイバーのＩＳは異常なまでの抵コストでイグニッションブーストを使用することが出来る。

「なら、これはどう」

放たれるのは突きの雨。

「はあああああっ！」

それを弾き続ける蓮。
だが、その瞬間ギシッと筋肉が軋む音がした。
実はこのスキルには大きな弱点がある。

イグニッションブースト自体が元々体に負担をかけるものである。
それを局所的に行えば、当然その負担は大きくなる。
ＩＳに乗ってから僅かの蓮ではその負担をもろに受けてしまうのである。

「これでも駄目みたいね。なら、ここからは本気でいくわよ」

楯無が放った突きはただの一撃。だが、そのスピードはまさに神速。
本来なら反応することも不可能な一撃。
蓮はそれを、直感のスキルとハイパーセンサー、そして人間離れな動体視力を持って見切り、弾き返す。

「ぐあっ！？」

だが、そのためにかなりの無理をした。
蓮の両腕は既にボロボロ。普通ならとっくの昔に、気絶してもおかしくない痛みが蓮を襲う。
（ちくしょう、これじゃあ攻撃できない。どうすればいいんだ。考えろ、考えろ……」
そして蓮は、普段では考えられないほど取り乱している。

「ねえ、この部屋暑くない？」

「急になにを言い出す？」

「温度ってわけじゃなくてね、人間の体感温度が」
「不快指数っていうのは、湿度に依存するのよ。ねぇ、この部屋って湿度が高くない？」
「しまった」
蓮は楯無の策が分かった。しかし、もうすでに霧に包まれている。
「ミステリアス・レイディ……『霧纏の淑女』を意味するこのＩＳはね、水を自在に操るのよ。エネルギーを伝達するナノマシンによって、ね」
パチンと指を鳴らす楯無。
その瞬間、爆発が起こる。
「ちっ。爆ぜろ。風王結界」
咄嗟に風王結界を展開し、爆発を相殺する蓮。楯無が使ったものは、ＩＳから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力『清き熱情』
限定空間でしか使用できないとはいえ。かなり威力を誇る。

「これで倒せたかしら？」

楯無も威力について理解しているが、今までのことから少し不安のようだ。

そして煙が晴れ、蓮の姿が見える。

「まだ、倒れてないの！？」

だが、蓮のその体はかなり酷い物だった。

筋肉はボロボロでしばらくは使い物にならず、ＩＳのシールドエネルギーも半分以上失われている。

「もう十分分かったでしょう？降参しないのかしら？」

「誰がするか」

「そんな体で何が出来るの！それ以上したら体壊れるわよ！第一実力なんて既に分かっているでしょ！」

蓮に対して怒る楯無。楯無に言わせれば、蓮がしている行動は無茶でかなり危険なのである。

「……楯無先輩」

「なに？」

「楯無先輩に戦いを挑んだ理由はもうひとつあるんですよ」

「えっ？」

「俺が楯無先輩に戦いを挑んだのは強くなりたいからなんですよ。」

「強くなりたい？」

「ええ、俺は別に正義の味方を目指している訳じゃないんで、一から十全てを救うなんて幻想はいだきません。だけど、全て救えないなら俺の大事な人達を守れる力が欲しい。あの力が無かった頃と違い、今はそれを成し遂げる力がある。俺は後悔したくないんですよ。だから、俺はここで諦めるわけにはいかない」

そういいながら立ち上がる蓮。体中の筋肉はボロボロ。立つことすら奇跡に近い。

「俺はこの一撃に全てをかけます。俺には次がありませんから」

そう言いながら、エクスカリバーを構える蓮。

「うん。分かった。おねーさんの奥の手を見せてあげるわ」

楯無の手の上に水が集まっていく。

ミステリアス・レイディの全身から水を形を作っていく。

「通常時は防御に回しているアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで放つ、一撃必殺の技。名付けて――」

《ミストルテインの槍》

構成するナノマシン全てが超振動破砕を行う破壊兵器で、どんな表明装甲でも貫くことができる。
さらに、装甲内部でエネルギーを転換、爆発を引き起こし、その威力は小型気化爆弾四個分に相当すれという、まさに奥の手だった。

「これがミステリアス・レイディの最高火力、いくわよ……！」

楯無がミストルテインの槍を構える。
それと同時に蓮もエクスカリバーを構えなおす。

「真名開放エクス（約束された）ー」

「ミストルテインのー」

エクスカリバーにはエネルギーが収束され、ミストルテインの槍は蓮に狙いをつける。

「カリバー（勝利の剣）！」

「槍！」

同時に放たれる二つの攻撃。
そして二つがぶつかり拮抗する。
　　刹那、
拮抗しあっていた攻撃は、相殺されるという形で幕を閉じる。
二人とも満身創痍。だが、

「どうやら俺の負けのようだな」

先に倒れたのは蓮だった。エクスカリバーの衝撃に耐え切れ無かったのだ。

「楯無先輩、ありがとうございます。おかげでなにか掴めたみたいなんで」

「ふふ、おねーさんに不可能はないんだよ」

「それより保健室に連れて行って貰えませんか？立てないので」

「あはは、しょうがないなぁ。蓮くんは」

そう言いながら蓮をお姫様抱っこする楯無。

「この格好は少々恥ずかしいですね」

「そのくらいは我慢しなさい」

そうして二人は保健室へと向かった。

蓮を保健室に連れていった後、楯無は考える。

「彼の理想は素晴らしいけど少し自分を軽視しすぎね」

蓮の理想は大切な仲間を守ること。
だが、それに自分は入っていない。

「だけど、彼にあそこまで言わせるなんて少しうらやましいなぁ」

楯無の人生に置いて、自分が他人に頼ることはほとんど無かった。

「もし、私が守っててて言ったら彼、私の事守ってくれるのかな？」

楯無が儚そうに呟く。

「まったく、この私がこんな柄でもないことを言うなんて。だけど、私もこういう感情抱いても良いよね」

そう言った楯無の顔は今までに見たことがないほどの笑顔だった。

閑話　更識楯無ＶＳ白井蓮（後書き）

いつもＩＳ　騎士王の系譜を読んでいただきありがとうございます。
今回は戦闘シーンを三人称で書かせて貰いました。
どこかおかしい点があれば言ってください。
後、出来れば今回の話で出て来た、魔力放出もどきの名称を考えていただきいと思います。

今回もこんな駄文を読んでいただきありがとうございました。
感想や意見も待っています。
これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十三話　二人の転校生（前書き）

間がかなり開きましたがなんとか書き上げました。

第十三話　二人の転校生

楯無先輩との戦いから二日。
怪我も治り、ようやく寮に戻ることができる。

「二日ぶりの部屋。やっと、戻ってこられた……って鍵が開いてる？」

鍵の閉め忘れ？いや、それはないだろう。まさか、敵対組織の介入か？ありえない話ではない。なんにせよ、注意はするべきだな。

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

バタンッッ！！

どうやら、頭にまだダメージが残っているらしい。エプロン姿の楯無先輩の幻覚を見るなんて。気を取り直して、もう一度。

「お帰りなさい。わたしにします？わたしにします？それともわ・た・し？」

「全部同じじゃないですか……。どうやって、俺の部屋の鍵を開けたんですか？」

現実逃避をするのは、諦めよう。だが、鍵は俺が持っている分と学園が管理している分しか無いはず。まさか、ピッキング！？だとすると、楯無先輩はかなり裏とかに関わっていることぬなるが……。

「もちろん、生徒会長権限で」

「それ、ただの職権乱用じゃないですか」

この学園の生徒会長はどこまでの権力を有しているのだろうか。

「楯無先輩、冗談はともかく、一体なんのようですか？」

「別に冗談じゃないんだけど……。まあ、良いわ。とりあえず、あなたのクラスにくる転校生についてよ」

転校生か……。こう短期間にくると、何か、作為的なものを感じるな。

「詳細は不明なんだけど、片方がドイツの軍人で、もう片方は……
……う～ん、今は言わないでおくよ、明日、自分で確認してね」

「それだけだと、別に珍しくないわけではないと思うのですが」

正体を明かしてくれない、片方は気になるが。

「珍しいわよ。片方は特に。じゃあ、私はこれで。」

まったく、あの生徒会長は。謎ばっかり残していって。本当に何をしに来たのか。

「あっ！一つ言い忘れてたけど、軍人の子、織斑先生と関係があるみたいだから」

千冬さんの関係者か……。一夏の場合、あの事件のせいで、千冬さんの関係者に若干、恨まれているから、警告通り、注意はしておくか。

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデ

ル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

みんな、ＩＳスーツの話題で賑わっているな。

「白井君のＩＳスーツはどこのやつなの？」

「俺のＩＳスーツは特注品。男用は存在しないから、イングリット社が開発したはずだ」

まあ、ＩＳスーツはＩＳを動かすためには、かなり重要な位置を占めているから分からないでもないな。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

流石、千冬さんだ。このクラスを一瞬でまとめるとは。カリスマがあるのだろうな。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使う

ので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや、駄目だろ。水着はまあ、ギリギリセーフとしても、下着は駄目だろう。主に俺の精神的に。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

慌てた姿がまるで子犬のようだ。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二各です！」

「「「えええええ！？」」」

楯無先輩の言っていた通り、転校生が来たか。

「失礼します」

「……」

成る程、楯無先輩の言っていた意味がよくわかった。確かにこれは

珍しい。まさか、転校生が男だとは。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルがみんなにこやかな顔でそう告げる。今はみんな呆気に取られていたが、これはかなりまずいな。念のために耳栓を持ってきて良かった。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入をーー」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああーーーっ！」

窓が揺れている！？耳栓が無かったらかなりまずいじゃないか！やはり、女子は凄いな。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～～～～～」

とりあえず、他のクラスの先生には合掌しておこう。生徒を抑えこむのは大変だろうから。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬さん、面倒くさいのは分かるけど、先生なんだから、投げやりにしない。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

もう一人の転校生。楯無先輩の言う通り、軍人だな。印象というか、雰囲気。それが、軍人のような感じがする。

「……」

クラスの女子たちを下らなそうな感じで見ているな。あれだと、クラスに馴染めないだろう。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬さんは確か、ドイツの軍で教官として働いていたらしいし、関係者ではあるな。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「ラウラ・　ボーデヴィッヒだ」

「……」

沈黙したな。文字通り。このクラスを沈黙させるとは、ある意味、凄いな。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

この空気に耐えられないのか山田先生が笑顔でラウラに話しかける

が、無慈悲な解答。山田先生には胃薬をあげるべきか？

「！　貴様がーーー」

一夏と目があった瞬間、空気が変わった？
ラウラが一夏に向かってつかつかと歩いていく。まずいだろ、あれ。
間に合うか？

「なっ！？」

危なかった。後、少し遅かったら、間に合わなかった。

「おい、今の一般人では耐えられないぞ。軍人が私情でこんなことをするな」

今の平手打ち、当たってたら保健室行きだぞ。まったく、あの事件は一夏のせいではないのに。

「蓮……ありがとう」

「気にするな、悪いのはこいつだ」

ラウラの奴がかなり睨んでくるが知らん。
悪いのは自分だ。

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同とＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

千冬さんがかなり強引にホームルームを終わらせる。まったく面倒な奴が来たな。

第十三話　二人の転校生（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。
かなりのスランプで、一日、数行という日が続いていて、今まで更新出来ませんでした。

魔力放出もどきについては、俊さんのエナジーブーストを使わせてもらいます。
俊さん、本当にありがとうございます。

感想や意見もどうかよろしくお願いします。

これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

アンケート

今回、作者がふとアクセス解析を見ると、二十万を越えていました。
皆様、本当にありがとうございます。
それを記念して、番外編を書きたいと思います。

番外編の内容はＩＳ　騎士王の系譜の主人公が別の世界に転生していたらというものです。
能力は基本的にセイバーの能力ですが、希望があれば別の能力にする場合もあります。
行き先は次の中から選んでください。

1　Ｆａｔｅ
2　恋姫無双
3　東方
4　ネギま
5　バカとテストと召喚獣
6　ベン・トー
7　その他

絡ませたいキャラや転生先の人間関係なども希望があれば、出来る限り反映させます。
これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十四話　ＩＳ実習訓練

俺はすっかり忘れていた。
この学園の女子の恐ろしさを。
今、俺はシャルルと共に追っ手から逃げている。
仮にも男である俺と完璧美少年なシャルルが一緒にいればこうなることぐらい簡単に予想出来ていたはずなのに。

「こっちにいたわよ！」

「早く、逃げられる！」

かなりまずい。逃げられ無かったらどうなることやら。

「見て、二人とも手を繋いでるわ！」

「創作意欲が湧いて来た！」

「蓮×シャルル……最高じゃない」

一部、かなりやばい発言が聞こえたが気にしない。忘れよう。精神的に辛くなるから。

「な、なに？どうしてみんな騒いでるの？」

この状況を見たら、普通に分かるだろう。

「当たり前だろ。男は俺たち、二人だけなんだから」

「……？」

何故、困惑する？殆ど、正解を言ったのと同じだぞ。

「あのな。ＩＳを操縦出来る男は今の所、俺たち二人だけだぞ」

「え、あっ！そうだったね」

「しかも、こういう騒ぎが好きだからな。お前も気をつけろよ」

「分かった」

とりあえず、この包囲網をどうくぐり抜けか。正面突破は難しいだろうし。

「まあ、とりあえず、これからよろしく。俺は白井蓮。蓮で良い」

「うん。よろしく蓮。僕のこともシャルルで良いよ」

「ああ。それよりもだ、シャルル。ここからはきついから覚悟しておけ」

「え、えええええ！」

俺たちの逃亡劇が始まった。

「なんとか着いたな」

「う、うん」

予想外の戦闘能力だった。ブービトラップを習っていなかったらやられていた。
まさか、こんな所で使うはめになるとは。

「早く着替えよう。遅れたら、シャレにならないからな」

時間もギリギリだし、早くＩＳスーツを着ないと。

「わあっ！？」

「どうした？そんなに声をあげて。というか、早く着替えた方が良

いぞ」

「う、うん？き、着替えるよ？でも、その、あっちを向いててね？」

「別に言わなくても着替えを見る気はないぞ？」

わざわざ、言うってことは傷痕とかあるんだろうか。ああいうの見られたくない人は多いからな。

「俺は着替え終わったが、そっちはどうだ？」

「ぼ、僕の方も終わったよ」

「じゃあ、行こうか」

「う、うん」

そして俺たちはグラウンドに向かった。

「全員揃ったようだな。本日より格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「はい！」」」

今日は二組と合同だから、人数はいつもの二倍。心なしか、声も気

合いが入っているように聞こえる。

「今日は戦闘を実演して貰おう。……凰！オルコット、そして織斑！」

「はい！」

「は、はい！」

「え、あっ、はい」

「専用機持ちは早く始められるからな。いいから前出ろ！」

三人ともご愁傷様。まあ、俺に白羽の矢がたたなくて良かったが。

「それで、相手はどうなりますの？別に一夏さんと鈴さん、二人同時でも構いませんが」

「なめてかかったら痛い目にあうわよ」

「私も努力したしね」

「慌てるなバカども。対戦相手は……」

そういえば、さっきから空気を裂くような音がこっちに近づいているような……

「あああああーっ！そ、そこの人、ど、どいてください～っ！」

やば。俺の方にＩＳが……って、うわ！？

「危なかった。ＩＳの展開が間に合わなかったら死んで……」

あれ、なんだ？この柔らかな感触は？これかなりまずい気が……。

「あ、あのう、白井くん……ひゃあ」

やばい。これはやばい。俺の直感が危険を感じとって……

「うわっ！？」

俺が今までいた空間をレーザーが走り抜けた。俺がおそるおそる、そちらを向くと、顔こそ笑っているが、目は一切笑っていないセシリアがいた。

「残念ですわね。外れてしまいましたわ」

「……」

あれ？今の音は確か……双天牙月が連結する音。あの状態だと投擲できたよな？

「おいおい。嘘だろ！？」

鈴、あいつ首は狙ったら駄目だろ。
この体勢だと避けれない。

「はっ！」

いつもの慌てたような声でなく、落ち着き払った声。それと同時に撃ち落とされる双天牙月。上体を少し起こしただけの状態であの命中精度。普段の山田先生と同一人物とは思えない。

「……」

俺だけでなく、他の人たちも山田先生の豹変ぶりに驚いているようだ。

「山田先生は元代表候補生だからな。今ぐらいの射撃は造作でもな

い」

「あ、あくまで、昔の話ですよ！」

いつもの山田先生に戻ってしまった。違和感があるとはいえ、先程の山田先生の方が教師に向いていると思う。

「さて、小娘共、いちまで呆けている。お前たちの相手は山田先生だ」

「え？流石に」

「三対一は……」

「私達としては……」

「安心しろ。今のお前たちでは三対一でも無理だ」

流石に三人とも怒りの表情を見せているな。
でも、千冬さんの言う通りだろう。
普段からコンビネーションを鍛えているならともかく、即席で組んだチームでは返って、足を引っ張りあって負けるということに……

「……終わるぞ」

流石に早くないか！？いくらなんでもこんなに早く終わるわけない

だろう。

「ま、まさか、このわたくしがこんなに呆気なくやられとは」

「アンタねえ！なに回避先読まれて誘導されているのよ」

「り、鈴さんこそ！ピットを展開する隙を作ってくれないのがいけないのですわ！」

「ふ、二人共、落ち着いて。こんな所で喧嘩しても意味ないでしょ？」

……流石にみっともないだろ。負けた責任の押し付けあいは。代表候補生としてどうなんだ？あれ。

「さて、これで諸君にも山田先生の実力は理解できただろう。これからは敬意を持って接するように」

その後、特になにも起こらずに無事実習は終わった。

第十四話　ＩＳ実習訓練（後書き）

いつもＩＳ騎士王の系譜を読んでいただきありがとうございます。

昨日のアンケートについてですが、特に指定がなければ設定はこんな感じになります。

１　Ｆａｔｅは衛宮士郎が原作セイバーの代わりに主人公をライダーとして召喚します。

２　恋姫無双は作者が今はまっているのが魏なので、曹操の幼なじみとして転生します。

３　東方はＩＳ学園卒業後に幻想入り。その後、霊夢や慧音と絡ませます。

４　ネギまは魔法関係者として男子校に通っており、殺那や真名と絡ませます。

５　バカテスは秀吉の幼なじみで体調不良でＦクラス入り。

６　ベン・トーはＨＰ部に入っている二つ名持ちの狼という設定

基本的にはこうなりますが、ご希望次第では内容はかなり変わりますので御了承ください。

後、アンケートは一人につき、二票までです。アンケートは来週の木曜日の０時までとさせていただきます。

感想や意見もお待ちしております。これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

第十五話　蓮のトラウマ

俺たちは今、学園の屋上にいる。
普段であれば、女子がたくさんいて賑わっているが、今日はおそらくシャルル目当てで学食に向かったのだと思う。

「今日は天気がいいから、屋上で食べるって言ってたよな？」

「そうじゃなくてね……」

一夏が視線を向けた所には、セシリアに鈴、シャルルそして箒だ。

「みんなで食べた方がおいしいだろう？シャルルなんかは右も左も分かる訳がないし」

「た、確かにそうだけど……」

「まあ、早く食べよう。お腹空いたし」

早く食べたい。お腹の空きすぎど死にそうだ。

「うん。はい、これお弁当。箒と一緒に作ったんだ」

「そうか、ありがとう。美味しそうな弁当だな」

もう少し多くても良かったんだが、そこまで求めるのは流石に酷だろう。

「うん。うまい。どれも手が込んでいるな」

「当たり前だ。お前に出した弁当は一夏と一緒に作ったのだぞ？美味しくて当たり前た」

「ま、それもそうだな」

「はい、蓮。酢豚。作っときたわよ」

鈴の酢豚か。食べるのは今回が始めてだが、中々美味しそうだな。ただ、酢豚だけというのが少し残念だ。

「蓮さん、今朝はわたくし偶然、朝早く目が覚めましたの！ですので、テレビで見て、美味しそうだったのでオムライスを作って来ましたの！」

オムライスだと？セシリアが言っているのは料理のオムライスのことか？漫画のオムライスではなく。

「あれ？どうしましたの？一夏さんに箒さん、そして鈴さん？そん

な、触れてはいけないトラウマを無自覚に触れてしまった友人を見るような目は？」

「セシリア、アンタ……」

「言わなかった私も悪いけど……」

「セシリア……すまない。先に言っておけば良かった」

「状況がまったく掴めないんだけど？」

みんなの声が聞こえるが何を言っているか、まったく分からない。ＩＳ学園では見ないで済むと思っていたのに。

「蓮さん！どうしましたの！生まれたての小鹿のように震えていますわよ！」

「そりゃそうだよ、セシリア。オムライスは蓮が最も嫌いな食べ物だから」

「テレビでは日本でも人気な料理と聞いていたのですが？」

「蓮に関しては例外に当たる。まあ、あんなことがあったから仕方ないのだが……」

「一体なにがあったのですの！」

「せ、セシリア。それについては俺が説明してやる」

「大丈夫？蓮」

「ああ。十年前の話なんだが……」

回想

「母さん。本当に大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫よ。今回は料理本見て作ったから」

待て。それは今まで、何も見ずに作ったといたということか。

「そんな訳で今日はオムライスよ。さあ、召し上がれ」

……母さん？これがオムライス？なんか炭化したかわいそうな卵がのっているこれがオムライス？

「どう？よく出来たでしょう？」

これを見て、そう思える母さんの目と頭は多分どうかしている。しかも、洗剤の香りがするのは気のせいだよな？

「う、うん。じゃあ、いただきます」

オムライスという名の何かを口に入れる。
その瞬間、思わずオムライスを吐き出しそうになった。
これは失敗というような次元のものでない。
まず、お米の芯がかたい。これは許容できる。だが、何故、ケチャップライスなのにこんなに辛いんだ。まるで、タバスコで作ったような……

「母さん……。ケチャップ、使った？」

「何言ってるの。当たり前じゃない。ほら」

母さん、それ、タバスコ。気づくよね、普通。卵の方はなんだろう？炭化しているから、苦いのは分かるが、なんかほのかに甘い気がする。更に、ケチャップ。これが一番酷い。ケチャップ、甘いのか、しょっぱいのか、分からない。

「ねえ、母さん。ケチャップの中に何入れた？」

「お塩入れすぎたから、砂糖も沢山入れたんだけど？」

母さん。その考えはいろいろ駄目だと思うんだ。そして料理本見て作ったのに過去最低の出来なのだ？これ以上食べると俺が危険だ。

母さんにまずいと言わないと。

「おいしいでしょ。母さんの自信作よ」

母さん。凄い言いづらい。というか言えない。仕方ない。俺も男だ。食べ切ってみせる。

「もう。蓮ったら、そんなに食べなくても……」

食べ切った。よくやった、俺。なんか眠くなってきた。

「母さん。眠くなったから俺、もう寝る」

「そう？お休み」

その後、俺は三日間、腹を壊し、寝込むはめになった。

「蓮のお母さんって、なんていうか……天然？」

そんな軽いものでは断じてない。

「すみませんでした。そんな事情があるとは……」

流石に予測しろという方が無理だとは思うが。

「まあ、セシリアのは見た目が良いし、トラウマを払拭するために食べてみるよ」

その後の記憶はないが、セシリアのオムライスが以上にまずかったのは覚えている。

トラウマが治る気がまるでしないと思った。

第十五話　蓮のトラウマ（後書き）

いつもＩＳ　騎士王の系譜を読んでいただきありがとうございます。

アンケートだけのものについては、感想を返さないので御了承ください。

感想は明日の昼までには返せると思います。

感想、意見、アンケート待っています。これからも、ＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします

第十六話　確執

「俺、死んでないよな？」

死因がオムライスとかシャレにならん

「あっ！蓮、起きた？」

「ああ。俺、一体どのくらい寝てた？」

「ええと、５時間くらい」

５時間か。腹も壊してないし、まだマシか。そういえば、シャルルとは同じ部屋だったな。

「ところでシャルル、シャワーの順番だけどどうする？俺はどちらでも構わない」

「僕はシャワーは後で構わないよ」

「良いのか？今日みたいなＩＳ訓練がある日は汗をかくぞ？」

「僕は汗はあまりかかないから、大丈夫だよ」

俺が先でシャルルが後か。
にしても、シャルルってどこか違和感があるな。何かを偽っているそんな感じ。まあ、俺の気のせいだろう。

「そういえば、蓮って放課後、ＩＳの訓練してるっていう話を聞いたけど、そうなの？」

「ああ、俺は他の奴らに比べるとまだまだだからな。努力を怠ることはできないからな」

俺の場合、ＩＳの知識と実戦経験、そしてＩＳの基本動作の応用が足りないから努力しないと。

「その訓練、僕も加わっていいかな？僕も専用機持ちだから少しは役に立つと思うよ」

「それはありがたい話だ。よろしく頼む」

「うん。分かった」

俺はシャルルという男友達ができ、少しはストレスが解消されると思った。

「ええと、織斑さんがオルコットさんや凰さんに勝てないのは、射

撃武器の特性を把握仕切れてないからだよ」

「一応、分かっていたつもりだったんだけど……」

シャルルがＩＳ学園に来てか五日がたち、俺と一夏はシャルルからＩＳに関するレクチャーを受けている。

「知識だけで知っているだけじゃ、本番では使えないからね。さっきも、間合いを詰めることはできなかったし」

「た、確かに。瞬時加速もタイミングも軌道も見切られてたみたいだし……」

「織斑さんのＩＳは近接戦闘オンリーだからね、射撃武装についてはしっかりとその特性を把握しないと戦いには勝てないよ。特に織斑さんの瞬時加速は直線的だから軌道の予測もしやすいからね」

「直線的か……どうしたらいいんだろう？」

「あ、でも瞬時加速中の急な方向転換は体に負担をかかって、最悪の場合骨折もありえるからね」

「これは蓮にも言えるよ。特に蓮のＩＳはエナジーブーストの使用を前提に考えられているから、体への負担は他の人よりかかりやすいから気をつけてね」

それは俺自身がよく知っている。あの時は筋肉はボロボロで骨もひ

びが入りかけてたらしい。使用するさいは気をつけないと。
それにしても、シャルルの説明はわかりやすい。

「こう、どかんっ！としてからずばーってやるんだ」

とか

「避けるタイミングなんて、感覚よ、感覚。分かるでしょ？」

とか

「右半身を右に十度傾けて、後方へ三十度反転ですわ」

正直、まったく意味が分からん。
鈴のはまだ分からんでもないが、箒とセシリアに関してはまったく。
まだわかりやすい鈴でも、感覚だけじゃ限度もある。
それに比べて、シャルルはじっくりわかりやすく説明してくれる。
まさに月とスッポン。

「織斑さんの白式と蓮のセイバーって後付武装がないんだよね？」

「ああ。俺のセイバーはとある英雄をモチーフとしたＩＳ。だから、後付武装は必要ないんだ」

「私の白式は拡張領域が空いてないみたい。だからインストール出来ないらしいの」

「たぶん、唯一仕様の方に容量を使っているからだと思うよ」

「唯一仕様……零落白夜のこと？」

「そうだよ。ＩＳと操縦者の相性が最高になった時に発生する能力。蓮も使えるらしいね」

「まあ、俺も使えるけど回数制限があるからな」

エクスカリバーやアヴァロンが回数制限なしで使える。もはや、チートを超越した何かへと変化してるな。

「ねえ、あれってもしかして……」

「嘘でしょ！ドイツの第三世代型だ」

「まだ、トライアル段階だって聞いたけど……」

「……」

ＩＳを纏いながら、殺気を振り撒いてるのは、もう一人の転校生、ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「おい」

「……なに？」

「貴様、専用機持ちだな。私と戦え」

バトルジャンキーの類ならまだマシだったが、ドイツ軍所属、千冬さんを教官と言って慕う、わざわざ、実戦経験の少ない一夏に戦いを申し込んだのだから、多分あの事件を知っている人間か。

「お前と戦う理由はないはずだが？」

「貴様には関係ない。黙っていろ。私が用があるのはコイツだ」

「ねえ、蓮も言ったけど、私には戦う理由なんてないわよ」

「黙れ。貴様さえいなければ教官は大会二連覇を成し遂げていたであろう。だから、私は貴様の存在を認めない」

ふざけんなよ。あの事件において一夏はなにも悪くない。しかもコイツは一夏という存在を否定した。それがどういうことかコイツは分かってない。存在を否定されることほど、つらいことはない。

「おい、お前」

「何の用だ。わざわざ秘匿回線まで使って」

「お前はあの事件について知っているんだろう？ならば、一夏に非

がないことぐらい分かるだろう。むしろ、悪いのは織斑千冬の妹である一夏に護衛を付けなかった奴らや一夏を誘拐した奴らだろ？八つ当たりするなら、そいつらにしろ」

「ハッ！なにを言っている。元々あいつがいなければ、誘拐事件も起こるはずも無かったんだ。ならば、原因はあいつにある」

「お前、それ本気で言っているのか？一つお前に聞きたい。お前にとって強さとはなんだ？」

「強さ？そんなの決まっているだろう？強さとは攻撃力だ。何を言っている」

「よく分かったよ。お前はただ表面的な力に固執する豚だ！そして一つ言わせてもらう。その考えでは千冬さんには届かない」

「き、貴様！」

ラウラが左肩に装備されている実弾砲を俺に向かって放つ。

「！」

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を行うなんて、流石にどうかしていると思うよ」

「シャルル、ありがとう」

「礼には及ばないよ。僕も個人的にむかついたからね」

「貴様！」

一触即発の空気。流石にここでの戦闘は被害を考えれば避けるべきだが。

「そこの生徒！何をやっている！！学年、クラス、出席番号を言え！！！」

担当教師が来たのか。タイミングが良いな。

「……ふん。今日は引こう」

そのまま、ラウラはアリーナをでていった。

「デュノア君、蓮、ありがとう」

「気にするな。あいつが個人的にムカついただけだから」

「僕も蓮と同じ理由だから気にしないでいいよ」

「それじゃ、今日の訓練は終わり。帰るとしよう」

その後、服を着替え寮へ向かった。

第十六話　確執（後書き）

いつもＩＳ　騎士王の系譜を読んでいただきありがとうございます。

アンケートの量が予想外だったので二十万記念は上位三つを書くことにします。
現在は東方　恋姫無双　Ｆａｔｅです。
まだまだアンケートは続くのでよろしくお願いします。

感想や意見、アンケート、お待ちしております。
これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

番外編　もし白井蓮がＦａｔｅの世界に召喚されたら（前書き）

番外編、その一です。楽しんでください。

番外編　もし白井蓮がＦａｔｅの世界に召喚されたら

誰だ？俺を呼び出したのは。ＩＳの世界で聖杯戦争が起きない限り、俺が召喚されるはずはないのだが。

「バカな！？七人目のサーヴァントだと！！」

今の声はランサー！？ということは第五次聖杯戦争か？いや、衛宮士郎の存在を確認するまでは断定出来ない。ランサーは危険だな。だが、ＩＳを起動する余裕はない。現界したクラスはライダー。生身の状態でいけるかどいか分からないが、ＩＳ近接用ブレードでランサーに切り掛かる。

「うおお！！」

ランサーはうめき声を上げながら、外に逃げていく。ステータスが弱体化していたが、なんとかなったようだ。マスターが居る方に振り向けば、やはり衛宮士郎が居た。ほとんど、決まりだな。何故、セイバーではなく俺が召喚されたのかは分からないが、召喚された以上その責務は果たすとしよう。

「サーヴァント・ライダー、召喚に応じて参上した。問おう、お前

が俺のマスターか」

「マスター……サーヴァントだって……？」

やはり、この衛宮士郎は原作同様と考えるべきか。よりにもよって、衛宮士郎か。前世で俺がしたことは確実に衛宮士郎が嫌うことだしな。黙っていたら、しばらくはなんとかなるか。

「そうだ。その令呪がマスターの証。安心しろ、マスター。俺が必ずマスターを勝利へと導いてやる」

ランサーはまだ表に居るみたいだから、戦いにいくとするか。

「どこに行くんだ！」

「先程の敵を倒しに行くだけだ。マスターはそこでいろ」

衛宮士郎にそう言って表に出る。そこにはランサーが居た。

「一応聞くがよ。この勝負次に預けねえか？」

「そこにいるおまえのマスターもワケが分かってなさそうだし、お互い万全の方が好ましいだろう？」

「断る。ここでお前を見逃すわけにはいかないからな。来い、セイバー！」

ＩＳを起動させておく。戦闘するとなれば、ＩＳを使わなければ、ランサーには勝てない。

「ハッ！良く言った！！だが、お前は馬鹿か！？武器も構えないとはうかつにもほどがある！！」

迫りくるランサーの槍を剣で弾き返す。

「何！？不可視の武器だと！！」

何を驚いている。鈴の見えない砲撃に比べれば、不可視の武器などまだ優しいだろう？
槍を弾き返された衝撃で隙が出来たランサーに切り掛かる。

「ぐ……！！」

ランサーがギリギリ反応して、こちらの武器を受け止める。

「ひとつ聞かせろ。お前のその武器、剣だな？」

「これがどんな武器でも関係ないだろう？お前はここで殺されるのだから」

「言ってくれるぜ！最優と名高いセイバーといえだけのことはあるか……」

こいつ、俺がセイバーだと勘違いしてないか。確かに剣を使っていて、尚且つ、この格好だから仕方ないこともないが……。

「ランサー。何を言っている。俺はライダーのサーヴァントだ。セイバーなどではないぞ」

「何！？剣を主軸にしたライダーなど聞いたことが無い」

「単純に俺はライダー、アーチャー、セイバー、バーサーカーの適性がある。そのうちのライダーが選ばれただけに過ぎない」

セイバーとして呼ばれていたら、最高だったが、今更言っても仕方ない。むしろ、アーチャーとバーサーカーだったら詰んでいた。

「この聖杯戦争はハズレかと思っていたが、こういう展開は悪くねえ」

「喋ってばかりというのもどうかと思うぞ。お前はランサーなんだから、その槍で語ればどうだ？」

「……ハハッ。いいぜ、ならばこの槍にかけて貴様を討つ」

ゲイボルグか。あれは避けれないしな。仕方ない。魔力を全て防御にまわすとするか。

「じゃあな……。その心臓貫い受ける！！」

ランサーが槍を放つ。本来なら避けることが出来る一撃だが、ゲイボルグの能力で避けることは出来ない。だが、心臓を貫けないほどの耐久を持てば、ゲイボルグと言えど意味は無くなる。

「刺し穿つ（ゲイ）死棘の槍（ボルク）！！」

因果の理を捩曲げて心臓を穿つ槍。その一撃は確実に俺の心臓を穿つはずだった。

「なんだと！？」

「防いだだと！？我が必殺のゲイボルグを！！」

ランサーの槍の弱点は槍の攻撃力以上の防御力を持っていたら防げるということだ。心臓を穿つという結果も、槍が心臓に到らなかっ

たら、発動するはずが無い。
シールドエネルギーがガンガン減っていくのにかなり焦ったが、首の皮一枚繋がっていた。

「ゲイボルグ。なるほど、お前の真名は……」

「チッ！まさか、こんなに早く正体がばれちまうとは」

ランサーが背を向ける。おそらく逃げるつもりだろう。

「逃げるのか？ランサー」

「あいにくマスターの指示でね。死ぬ気があるなら追ってこい」

跳躍して逃げていくランサー。追いかけるつもりは無い。とりあえず、俺がすべきなのは衛宮士郎に聖杯戦争について説明しないといけないのか。まったく、面倒だ。

番外編　もし白井蓮がＦａｔｅの世界に召喚されたら（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

番外編その一です。とりあえず、ランサー戦まで書きました。続きが見たい方は感想に書いてください。

ついでなので主人公のステータスを公開します。

通常時

クラス　ライダー

マスター　衛宮士郎

真名　白井蓮

性別　男性

身長　１７８ｃｍ　体重６２ｋｇ

属性　中立　中庸

筋力Ｄ　魔力Ｃ

耐久Ｄ　幸運Ｂ

敏捷Ｃ　　宝具??

クラス別能力

対魔力Ｂ
発動における三節以下の魔術を無効化する。

騎乗Ａ＋　騎乗の才能。獣であれば幻想種すら乗りこなす。

保有スキル

カリスマＢ
国を率いるに十分な度量

直感Ａ
戦闘時、つねに最適な展開を感じ取る能力。

破壊工作Ｂ
戦闘の準備段階で相手の戦力をそぎおとす才能。

星の開拓者ＥＸ
人類史のターニングポイントになった英雄に与えられる特殊スキル。
あらゆる、難行が不可能なまま実現可能となる。

宝具

ＩＳ　セイバー
ランク　Ａ＋＋
対人宝具
レンジ　１
最大補足１人

こんな感じですね。主人公のスキルについてですが、この世界の主人公はバッドエンドの白井蓮です。宝具については出たものだけを載せます。詳細は本編では一切明かされませんので、知りたい方は感想で続きを希望してください。執筆が遅れない程度にＦａｔｅを書きます。

感想や意見もお待ちしています。

これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

番外編　その二　遠坂との出会い（前書き）

番外編、その二です。この番外編ではバーサーカー戦までを予定しています。

番外編　その二　遠坂との出会い

「マスター、一つ聞くが、聖杯戦争についてどこまで知っている？」

これで知っていたのなら、かなり楽なのだか。

「聖杯戦争？なんだよ、それ。おまえは一体何物なんだ！？」

「この聖杯戦争で戦うため、おまえに召喚されたものだ」

「だ、だから！その聖杯戦争ってのは何なんだよ！」

「本当に何も知らないのか。とりあえず、説明してやる」

遠坂あたりなら、本来の実力も発揮出来るし、ここまで常識が無いことも無いのにな。

「聖杯戦争。聖杯を求める七人の魔術師たちによる殺し合い。聖杯とは所有者のあらゆる願いをかなえる存在。俺たちサーヴァントはマスターの代わりに戦う下僕」

「そしてお前はこの儀式に参加するマスターの一人として選ばれたのだ」

「せ、聖杯！？殺し合いだって！」

魔術師としての常識が欠けている衛宮士郎には忌避すべきものであるし、なによりも、彼自身の信念が許さないか。

「新しい敵が現れたみたいだ。話は後で」

「おい！敵って誰だ！」

この場面だと、出て来るのはアーチャー。
攻撃しなくても良いが、アーチャーはセイバーを知っている。下手に表情を変えられると俺の存在に疑問をもたれる可能性がある。
ＩＳを展開したら、殺してしまう危険もあるから、ＩＳ近接用ブレードで切り付けるとするか。

「クッ！」

アーチャーが霊体化する。少し身長が低い気がしたが、気のせいか。

「アーチャー！？」

遠坂にも攻撃をしておこう。衛宮士郎が止めるだろうし、止めなかったらマスターが一人減るだけでデメリットは特にないだろう。

「やめろ！ライダー！！！」

止めたか。衛宮士郎らしいな。

「まあ、マスターの意向だから従うが、彼女は敵だ。ここで仕留めておいた方が良かったと思うが」

「ダメだ。俺はまだ納得していない。本当に敵なのか、そいつは？そうだとしても、何故殺さないといけないんだ！」

「マスター、確かに敵かどうか不明だが、もし敵だとしたらどうするつもりだ。最悪、殺されるかもしれないぞ」

「味方かもしれないじゃないか。相手に確認をするべきだ」

俺が言うのも何だが、敵かもしれない相手の前で口論するのもどうかと思う。

「敵を前にして言い争いなんて、随分余裕なのね？」

「とりあえず、見逃してもらえるかしら？とりあえず、下がってもらえるかしらライダーさん」

遠坂の正体を知っているから、この態度も猫の皮を被っているだけと分かるが、知らなかったら猫の皮を被っているなんて分からないだろうな。

「こんはんは、衛宮くん。ひとまずお礼を言っておくわね」

「遠坂！？なんでここに？って、おい」

「衛宮くん。令呪は戦いの切り札になるものよ。こんなことで使っていたら、後で苦労するわよ」

お前が言えたことじゃないだろう。アーチャーに苛立って令呪を使ったお前は。

「まあ、そこまでして助けてくれたワケだし。ここは感謝しとかないといけないわね」

「切り札って何のことだ？」

しまった。衛宮士郎に令呪のことを教えるのを忘れていた。

「俺は何も使った覚えはないぞ。いや、それよりもオマエは本当にマスターなのか？」

「……ちょっとアンタ。まさか令呪のシステムはおろか、聖杯戦争

のことすらろくに知らないってんじゃないでしょうね！？」

「いや、聞きはしたが何がなんだが……」

衛宮士郎にもう少し聖杯戦争について教えておくべきだった。

「はあ……。呆れた。それじゃまるっきりのド素人ってことね」

「まあ、いいわ。油断してたわたしも悪かったもの」

「遠坂どこへ？」

「中で話しましょう。この戦いのあらましを説明してあげるわ」

遠坂はそのまま衛宮家に入っていく。

「マスター、今の所、彼女に害意はないみたいだ。マスターはとりあえず聖杯戦争についての知識が必要だ。彼女に聞くと良い」

「ああ、分かった」

俺たちは衛宮家に入っていった。

「いいかしら？それじゃまず衛宮くんにも聞かれたけど私は正式な聖杯戦争のマスターよ」

「そして貴方と同じ魔術師でもある。衛宮くんは知らなかったみたいだけど

「だって、オマエ学校じゃ、誰から見ても優等生で男子にアイドルみたいな存在で……」

マスター、その発言はどうかと思うぞ。

「あら。衛宮くんもそういう風に思ってくれたワケ？」

言わんこっちゃない。

「え、いや……それは……」

「魔術師は正体を隠すもの。衛宮くんだって魔術師だってこと隠しているでしょ？」

「え……知っていたのか？」

「なにせマスターってのは魔術師にしかなれないものよ。衛宮くんの場合は事故だろうけど。貴方がマスターなんて驚きよ」

「そうか。遠坂が魔術師でマスターというのは分かった」

「それじゃ、本題よ。聖杯戦争は聖杯の所有権を巡っての戦い。マスターに選ばれた者にはサーヴァントと令呪が与えられる。これはライダーに聞いたかしら？」

「ああ、大体のことは聞いた」

「令呪ってこれだよな？確かマスターの証だって……」

「マスター、令呪は俺たちサーヴァントに対する三度限りの絶対命令権。それを使えば、俺がどんなに拒んでも命令に従わせることができる」

「そうか！さっきライダーを止めることが出来たのは」

「令呪の力だ。更にそこ強制力は聖杯に起因するもの。その気になれば空間を移転させて呼び出すような、奇跡に近い命令ですら可能になる」

「それで切り札ってわけか」

「そういうこと。付け加えると令呪無しでサーヴァントを従わせることは出来ないわ。何せ、彼らは実在した英雄。人の手に余る存在よ」

「え？英雄って、昔話に出て来る…」

「そう、神話や伝説、数えたらきりがないわ。生前の偉業により英雄に認められた人物は英霊の座に迎えられる」

生前の偉業か……。俺は真っ当な英霊ではないからな。ある意味、反英雄よりもたちが悪いからな、俺。

「聖杯は彼らに7つのクラスを当て嵌めることでこの世に召喚される。7つのクラスとは、セイバー、ランサー、ライダー、バーサーカー、キャスター、アーチャー、アサシン。聖杯は召喚された英雄達に相応しいクラスを割り当ててマスターに与えるわ」

「そしてマスター同士を戦わせ、最後に生き残った者を自らの主と認めるの。これがこの聖杯戦争のあらましよ」

「そんな……人の命をまるでゲームのようにやり取りするなんておかしいだろ！」

「そうね。だけどその表現は正しいわ。選ばれた7人の魔術師たちかサーヴァントを手駒として聖杯を目指し戦うゲーム」

「貴方はそのゲームに巻き込まれたってわけよ」

「それじゃあ、これから行くところがあるから。貴方もついてきて」

言峰教会か。そのあとのバーサーカー戦をどうするか。まあ、なんとかなるか。

そして俺たちは言峰教会に向かった。

番外編　その二　遠坂との出会い（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

今回出て来た宝具について説明します。

ＩＳ近接用ブレード

ランクＥ

種別　対人宝具

レンジ　１～３

最大捕捉　１人

由来　ＩＳの武装の一つ。この武器は主人公が護身用に千冬から貸して貰ったもの。宝具としての能力は無いが、武器の性質上、武器を振るう筋力さえ存在すれば、誰でも扱える。

こんな感じですね。
また、ＩＳを展開している状態は筋力がＢ＋という点を除いて、士郎セイバーとステータスは一緒です。

感想や意見もお待ちしております。

これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

番外編　その三　言峰教会とアーチャーのサーヴァント（前書き）

今回の話で終わらなかった。次回で番外編は終わりです。東方と恋姫は二巻の内容が終わってからです。

番外編　その三　言峰教会とアーチャーのサーヴァント

「遠坂、今の……」

「ええ。またガス漏れ事件みたいね。ホント物騒だわ。何人の人が病院送りになったのかしら」

「なあ、マスター。一つ聞きたいんだけど、なんで制服のままなんだ？」

しかも胸に血痕が残っている。下手をしたら警察に事情を聞かれることになる。

「着替えている暇が無かったんだ。それよりも遠坂、お前のサーヴァントはどうしたんだ？」

「ライダーに止めを刺される前に緊急避難させたわ。今は傷を癒すために療養中よ」

「そうか」

アーチャーか。俺より身長が高いはずなのに、実際は低かった。俺の勘違いか？後で確認はするべきだな。

「すまないな、遠坂。敵である俺の面倒を見てもらって」

「勘違いしないでよね。わたしは貴方に借りをつくったままにしたくないだけ。もし、次にマスターとしてわたしの前に立つのならわたしは迷わず殺す。だからわたしを味方だなんて思わないことね」

マスターは遠坂の言葉で気を引きしめているが、なんだかんだで甘いからな、遠坂は。甘さを捨て切れないか。俺も昔はそうだったな。

「さっきから思っていたんだが、どこに向かっているんだ？」

「この戦いの監督役のところよ。そいつが聖杯戦争を取り仕切るから、会っておいて損はないわよ」

原作通りなら合いたくないな。俺はあの手合いが最も苦手だ。

「ついたわ。ここが言峰教会よ。安心して。ここの神父とは知り合いだから危険はないわ」

「マスター、俺は外で外敵に備えておく。良く分からないが危険な空気がする。気をつけておけ」

「ああ」

マスターと遠坂が二人で言峰教会に入っていく。俺は見張りでもし

ておくか。

「少し構わないか？ライダー」

「誰だ！？」

声がした方を見ると、そこには一人の女がいた。褐色肌で白髪、髪型はポニーテール。身長は俺よりも低く、赤いコートに黒いスボンと軽鎧を着ている。その姿はまるで……

「アーチャー？」

「ああ、そうだ。私はアーチャーのサーヴァントに割り振られている」

アーチャーが女？有り得ない話ではないか。平行世界の中には女だった士郎も存在するはずだから、アーチャーが女で召喚されてもおかしくはないな。

「で、何のようだ？まさか、ここで戦うとか言い出さないよな？」

「そんなはずなかろう？まだ、君から受けた傷は癒えていない。そんな状態では勝ち目などない」

「そうか。それで何の用だ」

「なに、剣を主に使うライダーなどあまり見たことがないから、少し興味が沸いただけに過ぎないよ」

「俺はセイバーとしての適性もあったから剣が使えるだけだ」

「成る程。それより、そろそろマスターが帰ってくるようだ。ライダー、なかなか有意義な時間だった」

そのまま、霊体化していくアーチャー。

おっ！アーチャーが言っていた通り、マスターが帰ってきた。

「マスター？顔色が悪いようだが大丈夫か？」

「大丈夫だ。少し気分が悪くなっただけだ」

「なあ、ライダー。俺はこの戦いを見過ごせない。だから、マスターになることにした。ちょっと頼りないマスターだけどこれからよろしく頼む」

マスターも少しは自覚を持ってくれたらしい。

「ああ、マスター」

この聖杯戦争。必ず勝ち残ってやるから安心しろ、マスター。

そして俺はマスターと共にマスターの家に帰ることになった。

「どうした、マスター？」

「ああ、少し考え事をしていた」

「考え事は良いが、出来るだけ気を抜くな」

考え事をしていて殺されたなんてオチはいやだぞ。

「ライダーがしっかりしていて助かる。俺は半人前だし、聖杯戦争についても分からないことだらけだもんな。おまえが味方で良かっよ、ライダー」

「そうか、マスター」

こんな言葉をかけられたのは久しぶりだな。

「ここで別れましょう、衛宮くん。次に会う時は敵同士よ」

「ああ、分かっている」

「遠坂だったな？」

「なによ？ライダー」

「おまえのおかげでマスターもかなり助かった。ありがとう。魔術師というにしてはかなり優しいな。おまえみたいな奴には結構好感が持てる」

遠坂はどことなく鈴に似ている気がする。もう会えないけど。

「な……！？ライダー、あんた、私たちは敵同士で……」

「世話になった礼ぐらいは言う。当然の話だ」

「分かったわ。せいぜい早死しないように気を付けてね」

そのまま去って行こうとする遠坂。

「あら、もう帰っちゃうの？」

俺たちの目の前に銀髪の少女が現れた。

番外編　その三　言峰教会とアーチャーのサーヴァント（後書き）

この小説を読んでいただきありがとうございます。

アーチャーをＴＳしてみました。実はかなり昔からＴＳアーチャーが出したかったのでようやく実現できました。
この番外編、友人から意外に好評を得たので、独立した話を書こうと思います。
もっとも、原作ライダー戦のところまでしか考えていないので実現には少し時間がかかると思います。多分、八月中には設定をきっちり考えて投稿出来ると思います。
その際は是非よろしくお願いします。

感想や意見を書いていただけると作者はかなり嬉しいので、皆様感想や意見、よろしくお願いします。

これからもＩＳ　騎士王の系譜をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7514s/

IS 騎士王の系譜

2011年8月17日03時26分発行